昭和四十九年三月

小森塚古墳群調査報告

附　宗像古墳　その他

香川県三豊郡大野原町教育委員会

はしがき

大野原町地域は，柞田川沿岸に展開した扇状台地であり，古くから，農耕地域として栄えたところであります。このような地形である大野原町は，また，古墳地帯としての特色を十分にもった地帯であります。

古記録によれば，２００余基の，大小古墳が点在していたことが，明らかにされております。中でも，大字大野原地域，大字中姫地域には，特に多くの古墳が点在し，長年月の間に開墾されて破かいされ，一面の田園と化しているのが現状です。ただ，現在，香川県指定文化財となっている三大古墳（椀貸塚・角塚・平塚）と赤岡山に現存する赤岡山古墳を除いては，全部地下に埋没し去って，現形さえも見ることができません。偶々，昭和４６年度から，県営圃場整備事業が，紀伊地区，中姫地区で着工され，農地の基盤整備が，続行されることになりました。

我が教育委員会としては，古墳地帯の基盤整備事業であることから，常に事業実施当局と，密接な連けいを保ちつつ，埋蔵古墳の損傷を防止することに注意を傾けてまいりました。その時，昭和４７年１０月に至り，中姫地区を中心に事業を続行中，宗像地域及び，小森塚，道下と，次々に大小の古墳跡を発見することになり，当局の理解と協力を得て，事業を中止し，その究明に，教育委員会の全力を傾注することになりました。幸い石川巌先生（観音寺市文化財保護委員）の指導を得て，遺跡の発掘，並びに調査の結果をまとめ，今回報告書を作成することになりました。幸い，諸賢のご指導と，ご教示をお願いいたす次第でございます。

昭和４９年３月

香川県三豊郡大野原町教育委員会
教育長　久保甚作

発掘調査関係者名簿

1 所在地			
	イ 宗像古墳	大野原町大字中姫	691番地
	ロ 小森塚古墳	〃 〃	2244番地
	ハ 道下古墳	〃 〃	2213番地
2 調査期間	昭和47年10月から		
	昭和48年4月まで		
3 調査主体	大野原町教育委員会		
4 調査組織			
〈調査研究指導者〉	観音寺市文化財保護委員	石川	巌
〈調査補助員〉	青山学院大学院学生	合田	芳正
	大野原町文化財保護委員	小山	頼雄
	大野原町教育委員	近藤	政雄
	大野原町教育委員会社教主事	藤田	茂
	〃	菰田	力
	〃	井上	久美子
	大野原町教育委員会学事課長	石川	利春

目　　次

はしがき
調査関係者名簿
1. 調査古墳の名称と所在地 ---------- 1
2. 調査主体，経過 ---------- 1
3. 調査概要 ---------- 1
(1) 小森塚古墳群 ---------- 1
(ア) 1号墳 ---------- 2
(イ) 3号墳 ---------- 3
(ウ) 2号墳 ---------- 4
(エ) 4号墳 ---------- 5
(オ) 5号墳 ---------- 6
(2) 道下1号古墳 ---------- 7
(3) 宗像(そうぞう)古墳 ---------- 9
(4) その他の古墳 ---------- 10
(ア) 道下2号古墳 ---------- 10
(イ) 西の後1号古墳 ---------- 10
(ウ) 西の後2号古墳 ---------- 10
(エ) 豆塚2号古墳 ---------- 11
(オ) 町役場南側古墳 ---------- 11
(5) 結び ---------- 11
(6) 附記 ---------- 12
(7) 附図 ---------- 13
(ア) 大野原町の関係地図 ---------- 13
(イ) 小森塚，道下古墳地図 ---------- 14
(ウ) 小森塚古墳群平面図等 ---------- 15
(エ) 道下1号古墳平面図等 ---------- 22
(オ) 宗像古墳平面図 ---------- 23
(カ) 西の後1号古墳平面図 ---------- 24
(キ) 各古墳出土須恵器測図 ---------- 25
(8) 写真 ---------- 37

1　調査古墳の名称と所在地

(1)　小森塚古墳群　　大野原町大字中姫２２４４番地（小字半田原）

(2)　道下1.2号古墳

　　１号墳　大野原町大字中姫２２１３番地（小字道下）

　　２号墳　大野原町大字中姫２２１１番地

(3)　宗像古墳　　大野原町中姫６９１番地（小字小坪）

(4)　西の後1.2号古墳

　　１号墳　大野原町大字萩原１６０３番地（小字西の後）

　　２号墳　大野原町大字萩原１６９３番地

(5)　豆塚２号古墳　　大野原町大字大野原６９３３番地（小字鷺の首）

(6)　町役場南側古墳　　大野原町大字大野原１２６３番地１（小字辻南）

この報告書に記述する古墳の所在地は，国土地理院発行５万分の１地図「観音寺」の北西隅から約３７.５*cm*，南西隅から３４～３８.５*cm*の所である。

2　調査主体・経過

調査主体は，香川県三豊郡大野原町教育委員会である。

１９７２年秋から大野原町の田畑の大半に，香川県営により，大規模な圃場整備事業が始まった。それにともなって，道路工事や，工場敷地も整備された。この作業が進行するにつれて，水田の下から突然，ブルトーザにかかって出てきたのが，道下１号，２号，宗像，西の後２号，豆塚２号，町役場南側の諸古墳であり，小森塚という墓所から出てきたのが，小森塚古墳群である。何れも予知できなかった存在である。

宗像古墳は，１９７２年１０月に調査し，その他の古墳は，１９７３年春に調査した。ただ西の後１号古墳だけは，１９５９年１１月に柿園を深耕した時に出たものである。したがって完全調査が出来た古墳は一基もなく，明治時代以前すでに，一部分破壊されていたものばかりであるのが残念である。

3　調　査　概　要

（1）　小森塚古墳群

小森塚は周囲の半田原の水田よりも，約１３０*cm*程高く標高３２ｍの平担な，１１２m^2の面積の土地であり，戦国時代に大野原に来たという小森氏の墓地となっていたが，県営圃場整備のブルトーザ工事によって出土してきたものである。(1)(2)(3)(4)(5)号は，非常に接近して埋葬してあった。（附図参照）２号は大野原町教育委員会に復元保存してあるが，他号は消滅している。

各号古墳共に，封土は全く不明である。しかし，各号の距離は図の如く3.5～2.8mしかなく，小さな封土を造ったとしても，くっつきあって境がなくなるであろう。しかも，埋葬年代が約半世紀の期間であり，各号ごとに立派な封土を造ったとは思われない間隔である。小森塚は東西21mなので一基の古墳の封土をその一族が次々に利用していったものかもしれないという可能性はあるが，それにしても配列を整理してあるとは思われないから，同一封土の可能性も強いものではない。各号とも地山を少し堀り下げて造形したものであることは確認できたが上部の盛り土は攪乱されていて封土に関する徴候は全くつかめなかった。おそくとも桃山時代頃から封土は攪乱されだしている。各号の床面の高低の差は図の如く，最大で42cmしかない，最低の3号で海抜30mであり最高は2号の30.42mであり，小森城の調査現在の地山は約30.70mである。塚の北側の田は30.72mで南側は31.27mである。北側の田からも同じような古墳が昔出土したそうであり，すぐ東南側の道下1号古墳の床面も30.70mでありその出土の田のレベルは31.48mである。これらのことからこの辺の古墳時代の地形は圃場整備工事直前の田畑の地形と変化していなかったことがわかる。標高30.70mを中心として，南から北に，5／100（m）の傾斜で下降しているゆるやかな原に小森塚古墳や道下古墳が造築されたことになる。調査現在のレベルが32mという小森塚はやはり封土があったなごりであると認めなければならないが，その高さや面積は不明である。古墳石室の様式は箱式石棺系統の2.4号と，横穴式片袖形石室系統の1.3号と壺棺の5号という様式であり，方角は，1.2.4号が概ね東西で3号が概ね南北である。

(7) 小森塚1号墳

(I) 石　　室

破壊されていたので築造物の基底部しか判明しないが，後期古墳で，横穴式右側片袖形石室の系統である。石室の全長は492cmでその内訳は玄室は長さ310cm，幅140cm，玄門幅87cm，羨道石壁は長さ182cm，左壁は152cm羨門幅76cmである。河原石を使用している。近所を流れている柞田川の石であろう。壁石は四段程（深さ約50cm)の石積であったということであるが調査の時には左壁に2段26cmの深さであった。奥壁は石1個しか残っていない。附図によると，A石は壁面が直線でなく一部に広がりを持ってB石と共に部屋の奥まった安定した所というような気分を感じさせる一様式をなしているようである。A'B'石も同様である。C石とD石との間が玄門となる。石室の底の根石（▨印の石）は総て石の長い面を壁面として用いているがD石だけは小口積に置き二面を玄門と玄室面とに使用している。玄室の壁石は下から2段目以上は小口積である。C石は面の上半分が左側に少し曲りそこからが玄室であることを物語っており，下半分の内面はD石と相対して玄門を構成しているK石があった跡がある。ABCDKの中が片袖形の玄室である。D石は壁石と同じ大きさの河原石を使っているのは珍しく，その上に石を積んで玄門を高くしたとは思われず，背の低い玄門であり，その上に天井石がのっていた可能性はない。CDEGは羨道であり羨門石と意識できるような背の高い立石はないようである。羨門の方向に幅が狭くなっている。玄室も玄門の方向に幅が狭くなっている傾向がある。羨門はE石に対するのがF石であるが，G石が余分にあるので石壁はDG長さ185cmであり，左壁は

CE長さ155cmである。だから羨道の長さは185cmとする。3号古墳も羨道の長さが左と右とでは異っている。1号も3号も共に，玄室内の床面は直径5～6cmのぐり石が約2段ぐらいに敷きつめられていて羨道には敷石はない。玄門と羨道との境には敷居石は置いていない。天井石のない様式（観音寺市母神山式古墳の様式）であろう。それは小森塚3号には天井石がなかったと推定されるし，この1号も深さ約50cmくらいであったらしいからである。石室の主軸は北から西に74°傾いている。壁隅の面取りはしていない。

(Ⅲ) 副葬品

＜須恵器＞

壺　3個　口縁部は内側で2段になっているものが1個で他は破損していて不明である。3個共頸部の厚さは根本よりも口縁部に近い方が分厚くなっている。肩と頸との間にふくらみがあり肩は角ばってなく底は丸底又はそれに近い。厚みは全体的に概ね均一の厚さで内部の凹凸はほとんどない。楢崎彰一氏の須恵器編年によれば岡期から福田期への変化期である。

杯　1個　口縁部は内側で2段になりかかっており器腹の立ちは高く垂直であり台部もやや深い。やはり岡期から福田期への変化期であろう。

提瓶　1個　頸はやや太く口縁部に向って外反しており，口縁は端を斜に直線的平面でつけてある。器腹の片面は平坦であり，別の片面は甲が高く内側は中央部で蓋をはりつけた跡の段がついており，その直径は大きい。福田期にさしかかっている時代であろう。

貨幣　3枚　鉄銭であるらしいがかなりもろくなっていて，3枚がさびてこびりついていた。丸形角穴で縁輪がある。時代不明，古墳から貨幣が出土したことは極めて珍らしい。

鉄鏃　1個　不完全なもの

(イ) 小森塚3号古墳

説明の都合で1号墳と同様式と思われる3号墳を2号よりも先に説明する。

(I) 石　　室

石室は玄室奥壁から羨門部に向かって，直線的な壁面で造られている。石室の主軸の方角は北から東に21°傾いている。壁石は2段積みであったようで，壁高は40cm以下であろう。地山を約50cm堀り下げて石室を造ったものである。用石は河原石であるが片袖部の袖石（玄門石）図D石だけが板状の割石で厚さ20cmで，55×95cmの大きさであり床面上壁高は40cm出ている。床下に埋っている部分が55cmで壁高より大で壁高40cmを保つためには深かすぎるという感じがする。このD石の上に他の石を壁石として積み上げることはなくて石室の壁の高さ（深さ）は40cmまでであると思う。三豊郡内の横穴式石室の玄門は，一本石の柱であるか又は，同じ大きさぐらいの2個の石積の柱であり，その場合いづれも玄門の壁面は分厚いものである。D石はこの様式ではないので，D石の上に石を積んで玄門を高くして天井石を乗せたとは考えられない。1.2.3.4号の距離が近いことも低い石室を想像させる。これにより壁高が60cm以下であって天井石が無く，横穴式石室の平面をもち，玄室だけに敷石をする母神山様式（観音寺市）と

3号墳とは同様式であると推定する。

石室を構成する石は河原石で小口積を主とし長い側を壁面として使用している石はすくない。奥壁の幅が1号ではやや狭くなっているが，この3号では一番広く150cmである。壁隅の面取りはしていない。B'石は少し玄室内側にはみでていてAA'BB'の区域は玄室の中の遺体安置所としての聖域を構成している点は1号と同じである。ABCDKという片袖形玄室である。玄室だけに小石を敷いて床面としている。玄門幅は85cmで，羨門のEF幅は80cmである。玄門の長さは340cm，羨道の長さは，CEが182cmであり，石質全長は522cmとなる。羨道壁の長さは1号と同じように片方の壁（DF）が少し短かくて166cmであるが，1号ではCDよりも，DFGが長くなっている。

(II) 副　葬　品

＜須恵器＞

提瓶　1個　頸は1号の提瓶のよりも少し細めであるが，1号のと同じぐらいに外反している。口縁は欠損していて不明である。器腹の片面は中心から半径2.5cmの間は平坦であるがそれから端の方には曲線となっている。その平坦部の内側は両端と区別された厚さである。別の片面は甲が高く内側は中央部で蓋をはりつけた跡に段があり，その直径3.5cmでややせまくなって更にその周囲に長径9.5cmのだ円形の段がつけてある。取手は完全に残っている。器体の厚さは，約0.7cmである。福田期のなごりを残した海北塚期である。

壺　1個　頸は口縁に向って外反し，口縁は，少し斜め下に伸びていてやや丸味をおびている広口である。頸と胴との境はわづかに丸味をつけている。肩は平坦になりかかっていて，胴が横に張り丸底である。提瓶と同じく海北塚期になった頃のものである。

杯　2個　深さを残しているが内側は凸凹がある。一つは口縁の0.6cm下に沈線と三角帯がきちんとつけてあり，他の一つは口縁が内側に向って傾斜している。いづれも丸底である。海北塚期の初期のものである。

玉類　硬玉製勾玉3個，出雲石製管玉12個，青色ガラス製管玉78個，紺色ガラス製臼玉94個，半透明ガラス製なつめ玉3個，緑色ガラス臼玉1個，水色ガラス臼玉1個，緑色ガラス小玉5個，水色ガラス小玉3個，紺色ガラス小玉1　個，紺色ガラス管玉2個，緑色ガラス管玉1個，水色ガラス管玉3個

鉄製品，鉄刀片，鉄鏃片

銀環大3個，小3個

(ウ)　小森塚2号古墳

(I)　石　　室

この古墳の床面の高さが，海抜30.42mで一番高い。主軸の方角は北から西の方に64°傾いている。石室の形は概ね矩形で幅約45cm，全長166cmでこの内側は，遺体を埋葬する主室が132cmで足元に縦幅12cmの境石があり隣は長さ22cmの副室がありその中には須恵器が副葬してあった。主室の深さは25cmで床面は5cm大の小石が2段ぐらいに敷いてあり，東側の頭

部から西側の足部に向って床面は，7／100(cm)の傾斜で下向している。床面の小石の敷きかたはやや凸凹している。副室の床面は主室よりも4cm低い。被葬者は未成年者であろう。箱形石棺で主室と副室の二室に分れているのは三豊郡ではこの2号だけであり珍しい。石室上部の土は灰白色の薄い層の重った6cm厚の土があったので天井石はなかったものと考えられる。三豊郡内の箱形石棺第3様式（観音寺市文化財保護協会編，昭和47年発行「観音寺市の文化財……考古資料シリーズ創刊号」の12・14頁を参照）では板石を使用しているが，足の膝附近の壁石の組合せ方に段がつく手法がある。2号墳の副室や次に述べる4号墳のEFGの構成は，その第3様式の膝部構成のなごりであろう。但し2号のE石も，4号のEFも左上りである点は一つの手法として把握すべきである。2号の頭部ABは奥壁に向ってわづかに狭くなっている。4号もまた，BCDが明確に奥壁Aに向って狭くなっている。この頭部の手法や膝部の手法や河原石を使い床に小石を敷き蓋石がないことは新様式のものであり，今ここにこの2号と4号とをもって，三豊郡箱形石棺の第4様式として規定する。2号は頭部の奥壁が数個の石で組まれ，かつ，H石K石の石室内側の湾曲はごくわずかであり，伝統的手法を守っていない。それに比べて4号は頭石がA石1個であり，H石，K石の内側湾曲は明瞭であり2号よりも古式の伝統を守っているので，2号が4号よりも新しい。すなわち三豊郡に弥生時代前期に入植してはじめて水田耕作を行なった人々の子孫が約600年間続けてきた箱形石棺がこの第4様式の小森塚2号墳を以って終り，母神山式古墳に交代したのである。時に6世紀中期である。

(II) 副　葬　品

＜須恵器＞

高杯　1個　脚は長く幅はあまり広くない。透しは細長い。杯は2段である。福田期である。

はそう　1個　口縁近くの外面に一段あり壺の肩部と口縁部との接続部分の幅は広い。櫛目や刷目による文様はていねいである。肩の線は海北塚期に近いが福田期末のものであろう。

首飾　1連　白色半とう明のメノウ製勾玉1個を左側に置き出雲石製の管玉で輪にしたものと，少量の紺色ガラス小玉と木製なつめ玉，1個があった。

腕輪　1環　直径3㎜の灰白色の石で，直径5.6cmの輪にこしらえてある。左手頸の辺にあった。

金属板　1板　4.9×6.2cmで厚さ0.8㎜の青銅製薄板で片面は一部分がクローム様に光りさびついていない。三豊郡の後期古墳に鏡が副葬されているのは今のところないが，もしこれが鏡の代用品であるとすれば極めて珍しい。いづれにしてもこの様な金属板は他に例がない。

(ヨ) 小森塚4号墳

すでに2号墳で述べたように，2号よりも4号が少し古いと考える。その理由は頭石Aが一本で造られ，H石やK石の湾曲が2号より少し強くて古式のなごりをとどめているからである。また副葬品が皆無であったことも古式に通じる。しかしBCD石が内曲しており，石室幅が，いづこも約40cmであり全体として矩形であり，床は約2段に小石を敷き石室の深さ約20cmで浅い

点などは2号と同様であり，第四様式の箱形石棺に規定すべきものであり，4号もまた6世紀前期または中期のものと推定できる。A石やK石等の上面が三角の稜をなしているのでこの上にさらに石を積み重ねたとは思われない。やはり2号同様に天井石がないものであったかと考えられる。石室は河原石で造られ、主軸が北から西に77°傾いていて石室の長さは160cmである。被葬者は成人である可能性が強いがE石とF石の配置は2号のEF石にはさまれた区域と同じ意識の手法であるから，未成年者（身長がひくいから）であるとも考えるがその場合にはEFG区に副葬品があるべきなのに須恵器片さえ見当らなかったのは不思義である。石室の壁石の高さが2号のようにそろってなく高低があるのも気にかかる。もし石室が少し攪乱されていたとしてもA石やK石は壁高を示している石であると考える。

(Ⅲ) 副　葬　品

皆無であった。箱式石棺には例の多いことである。

(オ) 小森塚5号壺棺

大形の須恵器壺である。胴幅45.5cm高さ46.5cmの広口壺である。口縁部はあまり長くなく外反し口縁部と肩部は直角に近い角度で交る。口縁の端は器体の上の先端をおりまげて厚みをつけている。肩の盛り上りがあり胴張りはきつくなく丸底である。厚みは器体の大きさの割に薄く0.8cmであり均一の厚さである。外面は口縁部で縦に櫛目を垂直に用い胴部ではていねいな刷目を横に平行につけてある。内面は青海波文をていねいに並べてある。色はやや黒色の地肌である。岡期の傾向の強いものであるがいささか次の福田期への傾向もある。一応6世紀中期に属することになる。この広口壺の蓋は不明である。この広口壺は垂直に置いてあった。図の如く1号から3.5mはなれてあり，1号2号各々の主軸の線上には位置していない。5号壺は何れかの古墳の副葬品であるという位置にはない。5号壺棺は弥生時代のよりも少し小形であるが，やはり壺棺であると推定する。この5号壺棺を三豊郡壺棺の第四様式と規定しておく。「観音寺市の考古資料シリーズ創刊号参照」。但し第三と第四の間に他の様式が将来発見される可能性がある。その時は第四の順位を下げるべきである。

＜小森塚古墳群の総論＞

各号相互の距離は2.8m～3.5mで極めて近距離であり，一基ごとが独立封土を持つことは困難な位置にある程である。5基が一族関係にある人々の墓であると想像するのが最も自然である。しかも6世紀の中期後期にわたる半世紀余りの期間の古墳である。よってこの5基を一連の古墳群として考察することは正当なことである。小森塚から十数メートル離れた北方の水田の中に1基程が過去に出土したということであり，塚の南南東30mの地点に道下1号墳があり，東20mの地点に道下2号墳があったという。これらの3基の古墳は小森塚古墳群と直接一連のものとは致しがたいが時代的にも少しの差であり，様式も同様であるので中姫地区の古墳考察の場合に小森塚を中心とした古墳群として一括把握することは可能である。各号とも追葬はしていないと思われる。

5基の小森塚古墳群が造られた年代を順番に整理すると次のようになる。

（1番）　4号と5号であり，6世紀前期の後半の頃。（6世紀中期ともいえる）

（2番）　1号である。6世紀真中頃。

（3番）　2号である。6世紀後期の初め頃。（6世紀中期ともいえる）

（4番）　3号である。6世紀後期の後半頃。

後述する道下1号墳は小森塚の2号と3号との中間の時期のものである。

以上のように箱形石棺（4号）と壺棺（5号）とが一番古い墓として塚に内在することは，三豊地方で弥生時代以来行われてきた両様式を素直に伝承しているということになる。（但し箱形石棺が，6世紀まで継続していたことは説明できるが，壺棺は，4～5世紀のものが不明である）6世紀中頃の2号墳で古式の慣習が終り，日本の先進地域の横穴式石室様式が1号・3号としてこの小森塚の氏族に受け入れられたのである。1号，3号共に母神山様式のものであり，普通の横穴式石室様式のものではない。（天井石がないことなど）。母神山様式の古墳群としては，観音寺市池之尻町母神山の西麓にある黒島林1～4号古墳群（老人ホーム敷地）と木之郷町千尋1号古墳がある。なお千尋4.5.6号古墳も母神山様式であったかも知れない。黒島林のものも6世紀のものであり，この様式の発生地が大野原であるか母神山であるか，それとも他所であるかは現在では判断できない。この小森塚において母神山様式が三豊郡内での古式系統の箱形石棺と壺棺に直接に継続していることは，小森塚古墳群の氏族が，観音寺市高屋町，室本町を本拠とする三豊開拓族すなわち，三豊の先住者系であることを意味する。

小森塚古墳群によって以上の如く重要なことが判明したのは地方史学上の基本的なかつ，貴重な発見である。5世紀には奈良方面の前方後円墳の手法を守って造った前方後円墳が郡内にも存在し（観音寺市原町青塚や，池の尻町三谷ひさご塚）6世紀には先進地域の横穴式後期古墳に必適する大円墳として大野原町辻の「ワンカシ塚」古墳等や池の尻町三谷の「カンス塚」古墳等が築造されている。であるから小森塚の1号，3号が造られたときにはすでに中央先進地域の墓制も行われていたのである。

保守的な小森塚古墳群の氏族と中央文化的椀貸塚，角塚，平塚古墳群の氏族との関係等の解明は今後の研究を必要とする。椀貸塚等は三豊地方に移住してきた中央豪族系の氏族である可能性が強い。

（2）道下1号古墳

この道下1号のある水田の西隣の水田は半田原という小字であり道下1号から北北西に30 mの地点にある先述の小森塚も半田原に属する。そばにある道下2号は1号から北方35 m，小森塚から15 mの地点にある。それ故に小字道下にある道下1号も2号も小森塚を中心とした古墳群に属する。道下1号は標高3148 mの水田の中からブルトーザによって発見されたものであり，1号の床面は30.70 mの標高であり小森塚古墳群と大差ない。現在は消滅していて，東洋炭素株式会社の敷地内の北方中央地点となっている。封土は消滅していて不明である。

(I) 石　　室

全長は390cmで主軸の方向は北から2°だけ東に傾いている。玄室は図の3石が玄室内にはみ出ていて右壁の1石，2石と対する左壁の21石，22石とで玄室奥幅128cmの聖域観を構成している。玄室の入口は，27石と7・8石とで狭く形成し幅92cmまでになっている。玄室の長さ218cmである。側壁は河原石を2段に積み小口積が多い。側壁の高さは約10cmで浅すぎるくらいである。玄室床は5～6cm大の小石を約2段に敷いている。28石が玄門石のような感じを与えるが，それに対応する9石が低くすぎて玄門石ではないから，玄門石を立てない手法の石室である。このような手法は天井石を置く必要のない母神山式石室の一部にも見られる手法である。小森塚1号と同手法である。羨道は床面が玄室より低く壁は河原石を一列にならべて造り左壁は162cm右壁は172cmの長さである。壁高は左壁29石で20cm，31石で13cm，右壁12石は6cmしかない。羨道幅は92～85cmある。羨道奥半分が28・31石と9・11石とで構成する前室的傾向の空間を作りその中に2列の壁（C～H石列とJ～N石列）をつけてある。C～H石列は玄室と羨道との境となり，J～N石列は小室を構成するようになっているが，その小室の大きさは小森2号の足元の副室の大きさとは同規模であるが2号のような副葬品はなかった。32～35石と12・13石にかこまれた部分が本格的な羨道であり，Q・P石で羨道入口をふさいでいる。この羨道の中間に少量の炭素粒と黒土色があった。28・35・9・13石で構成されるような様式の羨道は，観音寺市池之尻町運動公園内「カンス塚古墳」と同様式のものである。ただしカンス塚は天井石が一部分にはあり玄門石と羨門石とは立派な柱石を立ててあり，道下1号の12石・32石に相当する石は細幅の一本石を立ててある。カンス塚では1号のC～H列石に相当するものとして玄門の敷居石を用い，J～N列石相当の積石は数十cmの高さで下方を広く積み重ねている。両古墳はほぼ同時代のものである。つまりカンス塚が中央文化的で見本の規格である。1号には天井石は無かったものである。その理由として，(a) 天井石に匹敵する石が残ってなく，(b) 側壁上面はよくそろった高さであり，(c) 石室内と側壁上と石室外に白褐色粘土が充塡していて，しかも盗掘，または追葬の跡がないこと等があげられる。玄室上表を天井石の代りに木質の天井を置いたかも知れないが，母神山様式の場合も，玄室を充塡する土の一番上層の土は白色的であるのが普通である。

この道下1号墳も母神山様式のものである。

(II) 副　葬　品

＜須恵器＞

高杯　1個　口縁部はやや薄くなり外反し腰部の沈線は太くてくっきりしている。脚はやや太くて長く透しは細い。福田期と海北塚の境くらいの時期であろう。

杯　1個　口縁部の立ちは少し外反し，口縁の端の方が少し厚くなってゆく。腰はやや深い。福田期末頃であろう。

鉄器片　1個　鉄鏃の柄の片である。

この道下1号の年代は6世紀の後期で，小森塚2号と3号の中間の古さであろう。

(3) 宗 像 古 墳

「そうぞう古墳」は小字小坪の水田で圃場整備のブルトーザ工事中に発見されたものである。小森塚古墳群から南南西に約600m離れた地点に単独で存在していた。現在は消滅している。

(I) 石　　室

封土は水田化して不明である。

石質の主軸の方角は北から西に45°傾いている。即ち玄室が東南で羨道が西北を向いている。玄室の奥半分と羨道の大半は破壊されていて明確でないが，床に敷いた小石等の残存により平面の大体を知り得る。石質の全長は約550cmでそのうち玄室は約350cm，羨道は約200cm。玄室の奥壁は約160cm，中央部の幅は約170cm，玄門幅87cm，羨道幅は約95cmである。石室は地山を40cm掘り下げて，根石は河原石の縦長い面が壁になるように並べて石室を造る。玄室の床には25×20cm大の平たい河原石を敷き並べた上に6～8cmの小石を約15cmの厚さに灰色粘土で固めてある。

玄門石は無くなっていたが，図のごとくE石，F石と推定する。玄室はE，Fで斜に狭くなってきているが，EとFの間にあるT石は玄室床面よりも5cm高く，横に長いS石は0cmである。このTT'S等の石が玄門の敷居石となっている。羨門の壁の根石は，高さ10cmで玄室の根石の17cmよりも低く羨門幅は玄室の所で87cm，中程では95cmぐらいであろう。羨道内には敷石はしていない。現在の玄室の壁の高さは17cmしかないが工事をした人によると，大人の胴ぐらいの高さに天井石が二枚（イ石とロ石）があった。イロ石は共に花崗岩の腐触しかかったもので厚さは共に約40cmである。つまり玄室内の床面から天井までの高さは，60～70cmぐらいの低いものであったことになる。このような低い玄室の例はすくない。ロ石は乗せるに充分な石がABだけで玄室内には見当らないので，もとの形は玄室の壁石が天井に向かってだんだんと狭くなっていたにちがいない。

(II) 副 葬 品

＜須恵器＞

短頸壺　1個　福田期でも後の方であろう。高さ19.8cm，幅18.7cmである。口縁から下になるほど厚くなる。

細頸瓶　1個　口縁部は下部が外反し、中程から上に立っているのは短頸壺と同様である。甲の中央部が高く上っている。やはり福田期の後の方であろう。羨門外西北2mから出土した。

平瓶　1個　頸は太く外反し，胴には張りがある。海北塚期のものである。

高杯　3個　aは杯の形がゆがんでいて脚に透しがなく長くない。高蔵期である。bは脚が短い，高蔵期である。cは沈線や突帯が丁寧で脚幅もやや広く透しがある。海北塚期である。

杯　5個　口縁の立ちは低い。高蔵期である。

蓋　1個　杯の蓋であろう。つまみの中央はひっこんでいる。高蔵期の後のほうであろう。

銀環　1個　直径0.6×0.565㎝の芯を2.59×2.39㎝の円形にしている。

鉄製太刀片

鉄製やりがんな片

羨門のところから約2mの西北方の地点に福田期の須恵器があった。これは古墳が最初造られたときに墓前のお供えとして副葬されたものであろう。以上のことから宗像古墳は6世紀中期に造られて6世紀末ごろや7世紀初期に追葬されたようであるが攪乱されていたので明確でない。

(4)　その他の古墳

(ア)　道下2号古墳

小森塚古墳から，東方20mで道下1号墳から北方35mの地点にある。出土地点の水田は標高30.92mでかつて水田の土が約90㎝おちこんで石組みがあったそうである。60㎝ぐらいの石を左右の壁としてその上に，約60㎝幅の石を天井としてかけてあり，中に須恵器があったという。すでに消滅していて耕作者の話しによるものである。

(イ)　西の後1号古墳

萩原の下中と道上との間にあり，県道佐馬地観音寺線道路（五郷方面行）の西側の脇にある。小森塚から南に1980m離れ，椀貸塚古墳から東南に1800m離れている。標高55mの平地で柿畑であったのを，昭和34年11月11日，深耕作業中に出土したものである。発見当時既に玄室の根石だけ残っており羨道や封土その他一切不明である。図の如く玄室主軸の方角は北から西に25°傾いている。左右の壁の基底部しか残っていないが，D石が玄室内部に向かって15㎝はいりこんでABC石がかこむ空間は少し幅広くなり玄室奥部の聖域感をあたえている。その面積から見て，G石は奥壁に接触していた床石の一つであると推定する。玄室内は小石が敷いてあった名残りがあった。玄室の長さは約300㎝奥壁の幅約185㎝中央の幅165㎝，玄室入口端の幅147㎝で少し狭く絞ってある。玄室壁石の根石の高さは57～80㎝である。玄門は幅75㎝でその左側の奥行は50㎝，右側は30㎝でそろっていない。この玄門石EFは高さは左右とも110㎝でそろっている点は基本的手法にかなっている。壁石は大きいのでおそらく壁が高く天井石のあった普通の様式のものと考える。それがいつの時代かに破壊されたのである。追葬のことなど不明であった。遺物としては，須恵器破片が少し残っていた。それによると，ほぼ高蔵期らしい。7世紀の前期である。玄室平面図は附図参照。

(ウ)　西の後2号古墳

西の後1号墳から東南100mの地点の水田にあったものである。70×40×40㎝前後の大石が少し残っていたのが，圃場整備のブルトーザー工事で発見されたが工事以前にすでに変形していたものであるので石室等や封土は不明である。ただ普通の様式の後期古墳であることだけは用石から推定できる。遺物はなく時代も不明である。

(ヱ) 豆塚2号古墳

県道丸井萩原豊浜線の拡張工事を行った際に昭和48年春出土したものである。県道のすぐ南側に小さな塚の形で残っていた。塚の高さは，2.4mで幅は5m×8mであった。土や小石が攪乱状態で盛土してあり，道路より50cm低い地山の上に古墳玄室の右奥の床の部分だけが残っていた。右壁に使用したらしい石は40cm大くらいのもの3個が間隔をあけて一列に並びその西側の床には60×60cmくらいの面積に15cm大ぐらいの平らな河原石が敷き並べてあった。遺物もなかった。感じからいうと7世紀ごろのもので玄室は3m前後の古墳であったのではなかろうか。この塚はたたりがあるという口伝があって地元の人は絶対に手をつけきらなかったのであるが，道路拡張でやむを得ず取り除くことになったのである。結局昔この古墳をほとんど破壊消滅さしたが何かその人々にたたりがあったのであろう。人々は土を盛りなおし神を祭ってこれを恐れたものである。この古墳から約200m西方に大きな古墳が昔あったそうである。

(オ) 町役場南側古墳

大野原町役場裏の道路端に地下から巨大な石が2個並行して出土した。東南と西北とを結ぶ方角を向いていたらしい。おそらく玄室の一角であったのであろうが，床面などは明確でないが一つの石の下半分には小石を敷いて安定してあった。遺物はなかった。

(5) 結　　び

三豊郡の大野原町といえば，椀貸塚，角塚，平塚古墳群と赤岡山古墳群とが著名である。何といっても大きな円墳が残っているからである。椀貸塚古墳群は周囲の考古学的環境から見て，おそらく中央系大豪族の勢力であると思われる。これに対して弥生時代から三豊郡に地元の人として開墾しながら次第に郡内に勢力を伸ばしていった地元勢力（発生の地は高屋，室本町）が3世紀頃までは箱形石棺と壺棺とを併用していた。その後の壺棺はまだ発見されていないが，箱形石棺は5世紀まで続いていたことがわかっていた。その5世紀に中央文化の直接的流入がありいわゆる，中期古墳が造られたがその数は郡内で5基しか発見されていない。6世紀になると各氏族などが後期古墳を築造するようになり，郡内におそらく1000基以上のものが造られた。その後期古墳は，奈良岡山，北九州などの先進地域に存在する中央文化的様式のものと，三豊郡独特の母神山様式といって，天井石がなく側壁は低く床には敷石をする等の特色をもった様式とがあることはわかっていた。母神山様式は昭和42年の観音寺市池の尻町三谷の黒島林1号古墳群の発掘調査によって発見されたものである。この時以来母神山様式の性格が判明しないままであったが，今回の小森塚古墳群の調査によってついに判明したのである。まことに貴重な成果を得たのである。古い慣習である壺棺と箱形石棺とが母神山様式と同居していたのである。すなわち箱形石棺にも壺棺にも第4様式があることが判っただけでなく，母神山様式が三豊の地元勢力に行われたことが判明したのである。小森塚古墳群は三豊郡の古代史解明に絶対的な重要性を持つものである。

弥生時代以来の三豊地方の地元勢力は母神山様式のものだけでなく他の古墳の様式も行ったこと

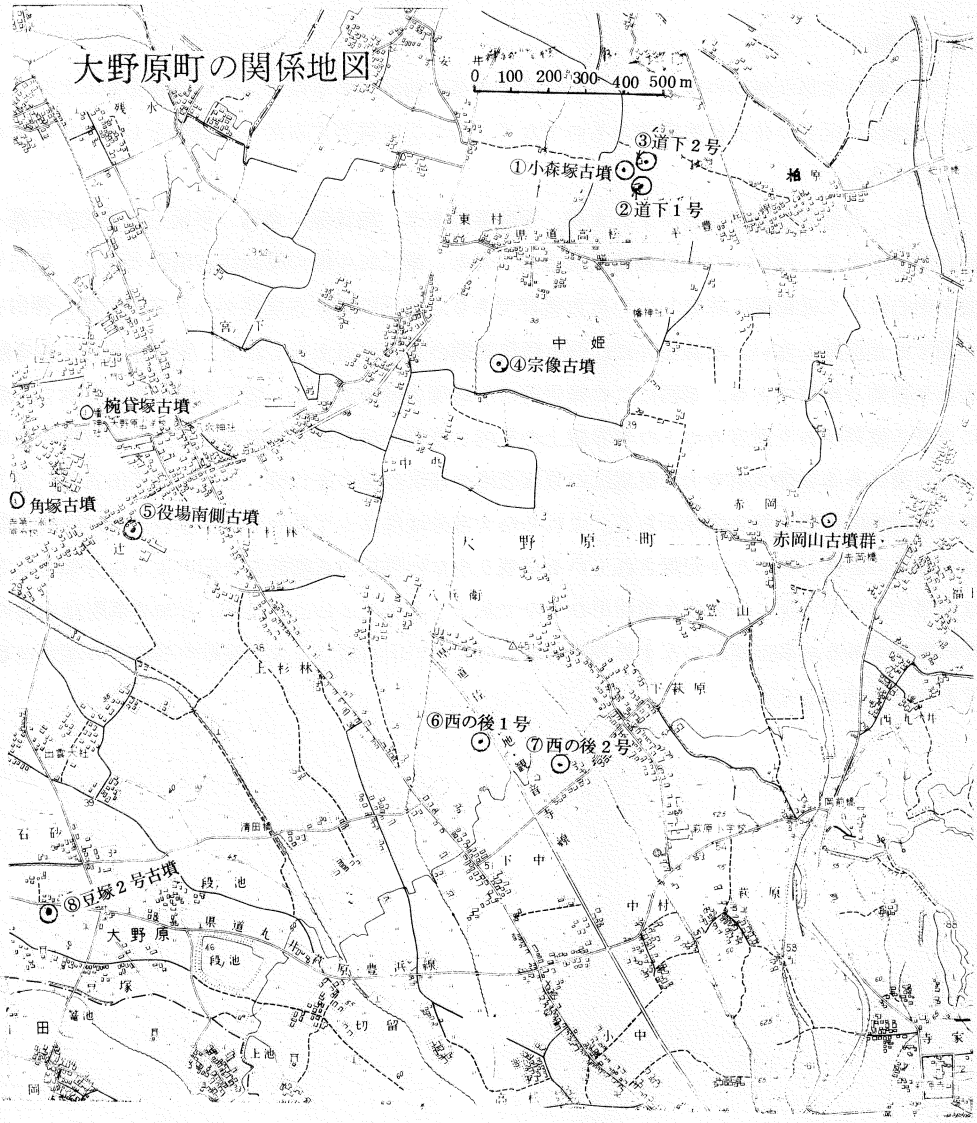
であろう。

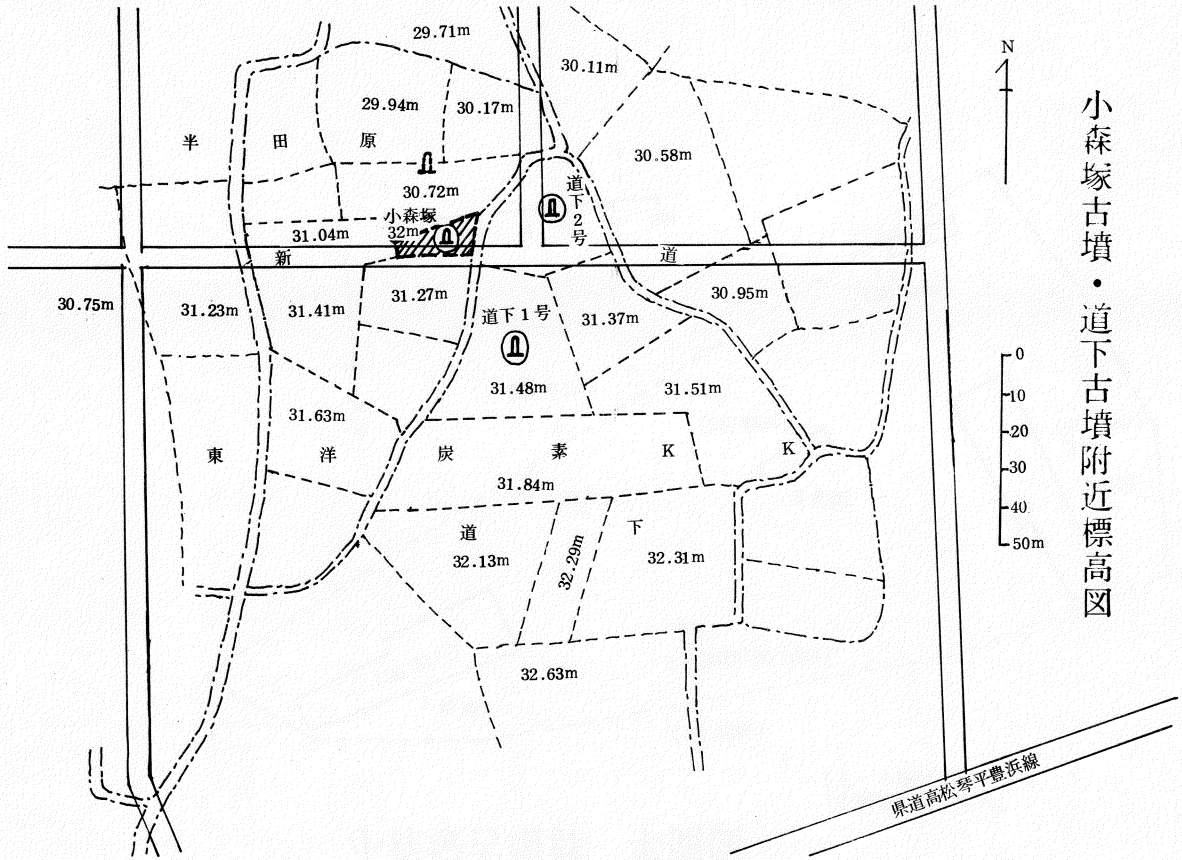
大野原町では辻や萩原方面は主として中央文化的様相の地であり，中姫は主として母神山様式の地であるようである。

（6） 附　　記

大野原町は平坦な地形の所としては特に古墳の多い地域であるので，その所在を記しておく。下記の古墳群の区分の仕方は決定的なものでなく，今ここに説明するための便利としてだけに使用するものである。

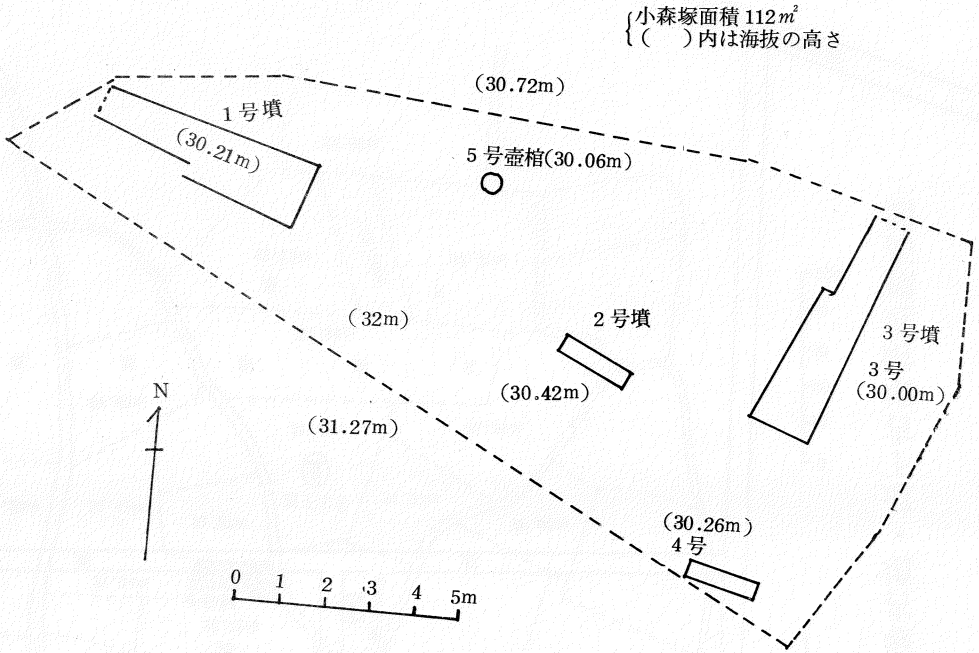
第一に，大野原古墳群は宮の下，大鞘，平塚等にあり，椀貸塚，角塚，平塚（県指定の三基）と岩倉塚等であり，四国一の大規模横穴式古墳である。第二に中姫の赤岡山古墳群があり，第三号円墳を中心にして近距離に林立していた古墳群である。第三に安井古墳群があり立石古墳，神田古墳が属するが現存しない。なお安井には弥生時代前期の土器が出土しており，安井寺という古寺院跡もあり重要な地帯である。第四にこの報告書の小森塚古墳群があり，道下古墳を含めておく。第五に丸井古墳群があり観音寺市との境界線上の平岡古墳群や雨の宮古墳群がある。この五群の他にこの報告書にある宗像古墳や大野原地区の豆塚古墳や萩原の西の後古墳，王塚，竜王山古墳，頂上古墳や花稲地区の埴穴塚古墳等がある。これらの大部分は現存してないものが多い。江戸時代末期には170基の古墳があったと記録されているが残り少ない現状で古墳群を上記のように分類することは適当でないので全く便宜的な説明用のものであることをことわっておく。なお豊浜町は古墳の少ない地帯であるが和田地区の五十鈴神社古墳（別名だい山古墳）と大野原町の古墳との関係は重要であって無視できない。


大野原町の関係地図
0 100 200 300 400 500 m
③道下２号
①小森塚古墳
②道下１号
④宗像古墳
椀貸塚古墳
角塚古墳
⑤役場南側古墳
赤岡山古墳群
⑥西の後１号
⑦西の後２号
⑧豆塚２号古墳
大野原町
中姫
宮下
赤岡
上杉林
下萩原
中村
萩原
大野原
段池
上池
清田橋
石砂
田
寺家

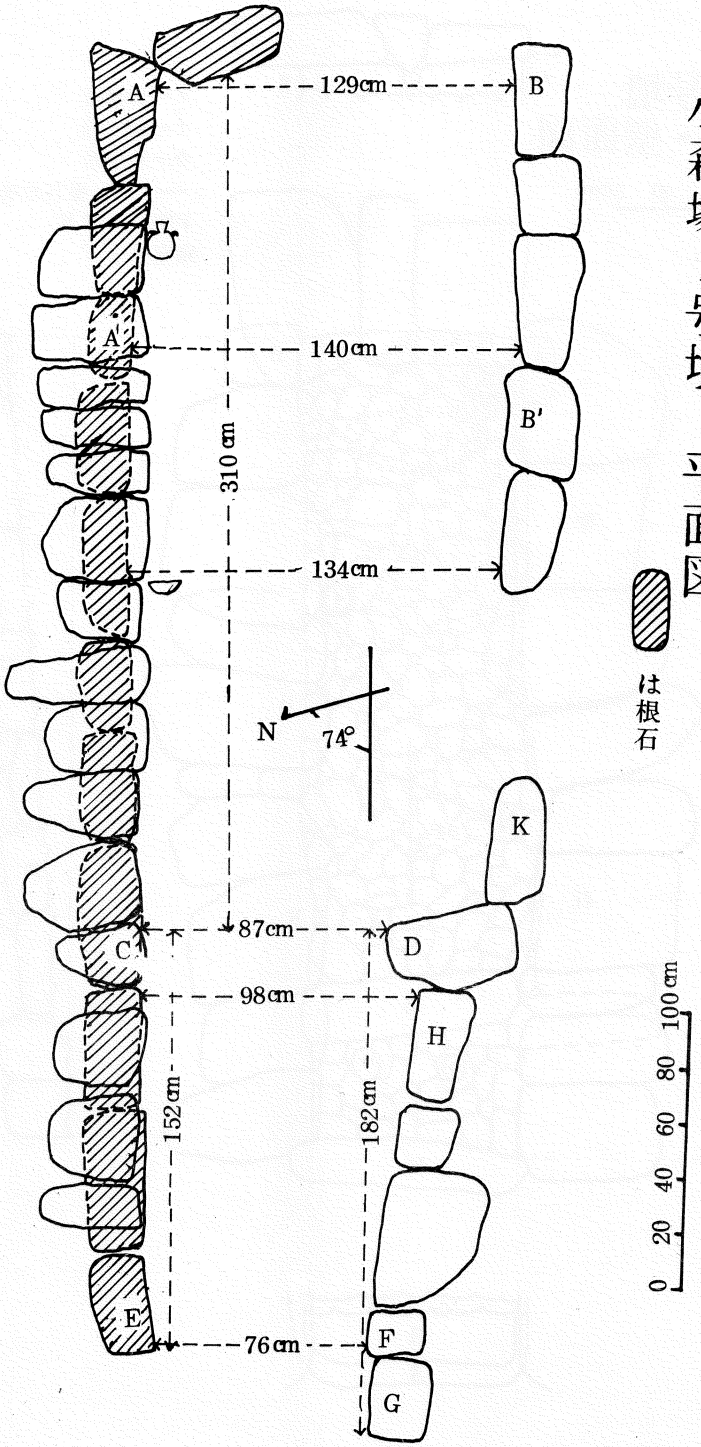


小森塚古墳・道下古墳附近標高図

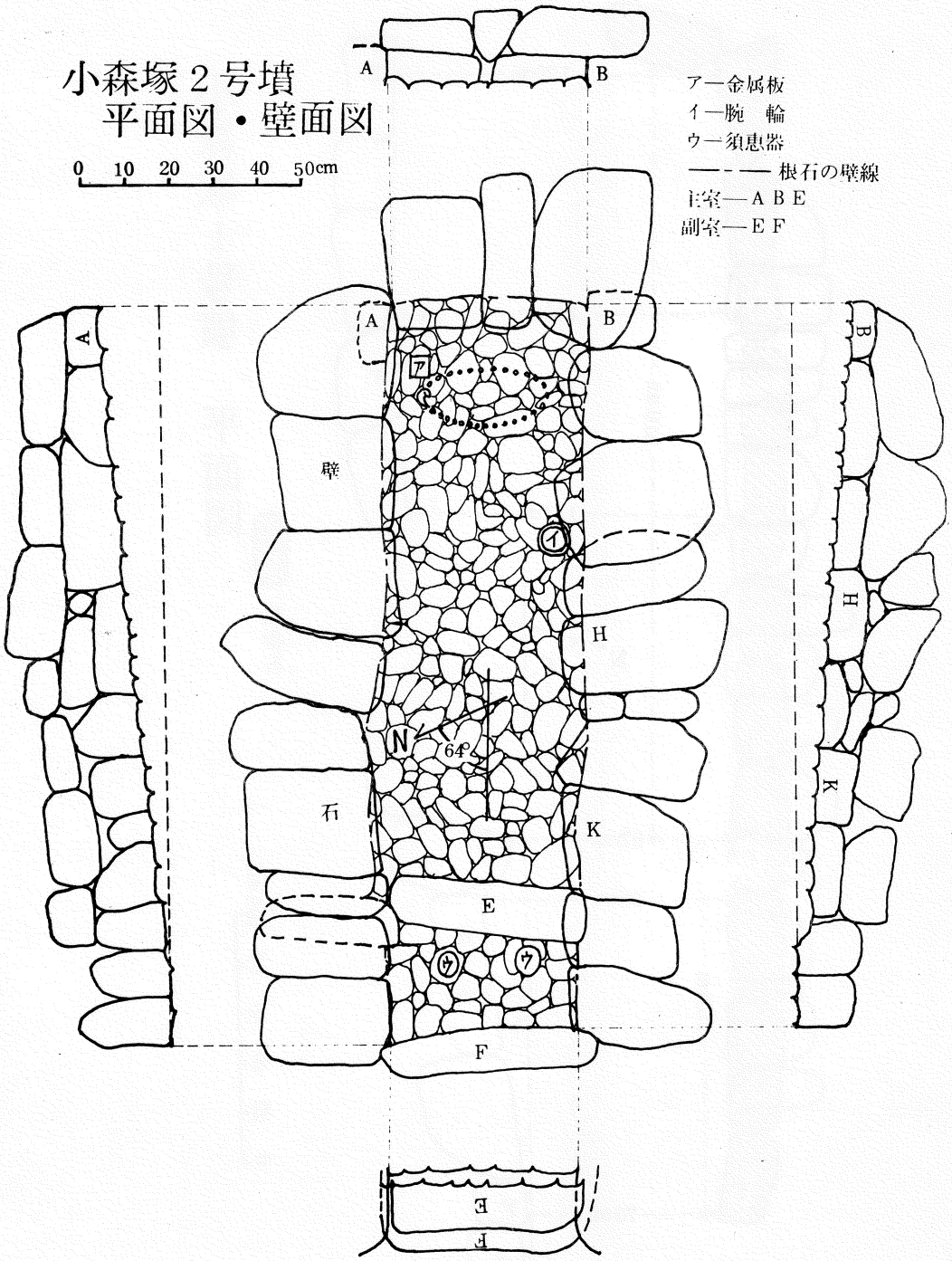
小森塚古墳群　平面図

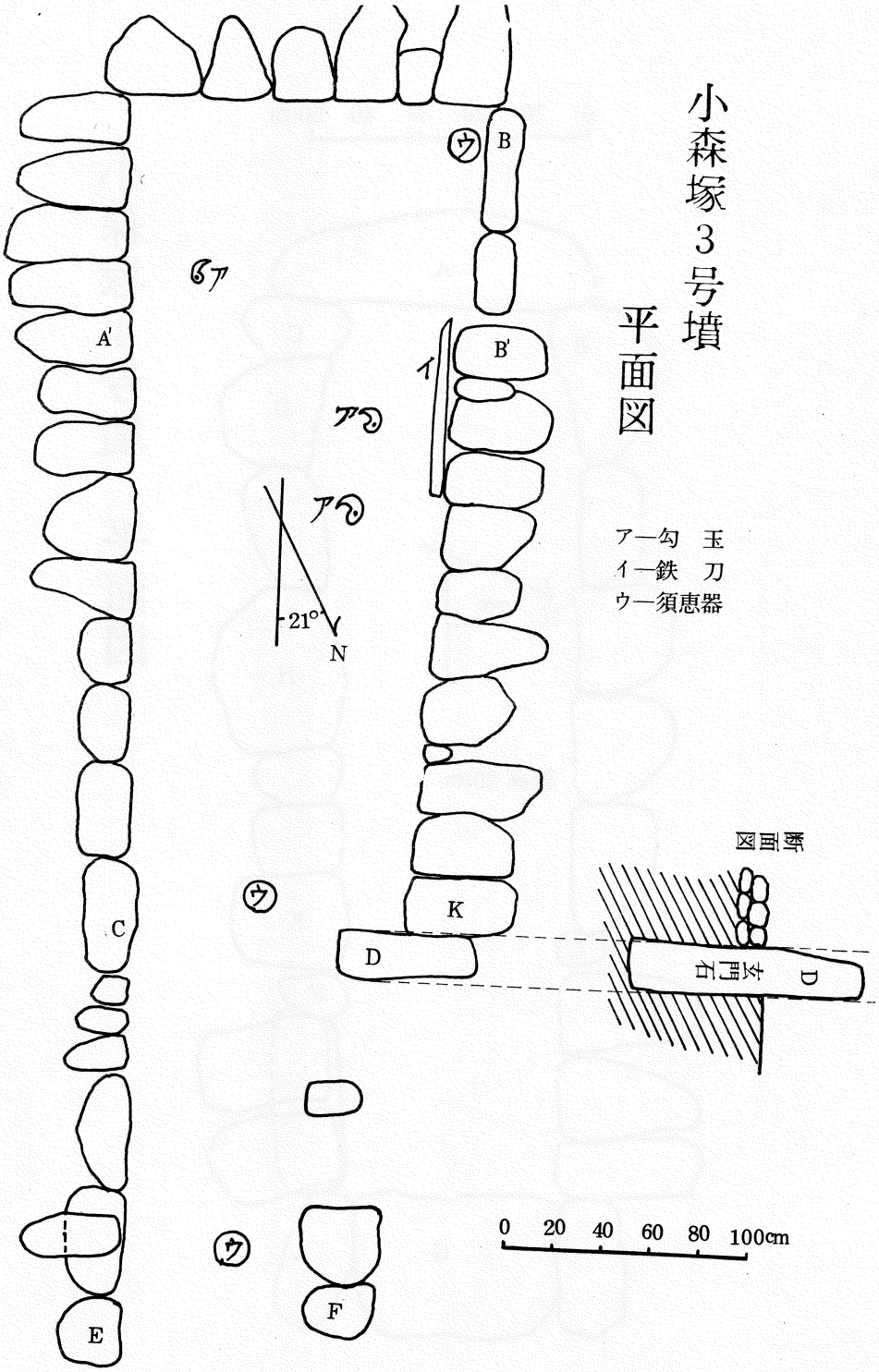

小森塚面積 112 m²
(　　)内は海抜の高さ
(30.72m)
1号墳
(30.21m)
5号壺棺(30.06m)
(32m)
2号墳
(30.42m)
3号墳
3号
(30.00m)
N
(31.27m)
(30.26m)
4号
0 1 2 3 4 5m

小森塚1号墳　平面図

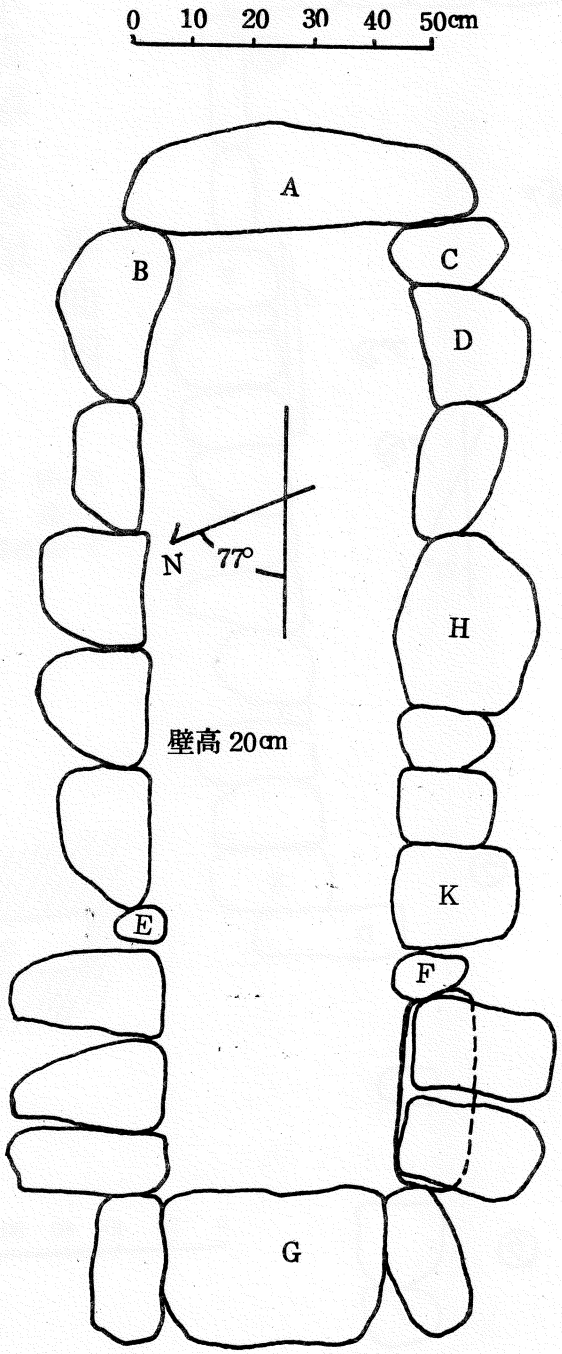

A
A'
B
B'
C
D
E
F
G
H
K
129cm
140cm
134cm
310cm
87cm
98cm
152cm
182cm
76cm
N
74°
は根石
0
20
40
60
80
100cm

小森塚２号墳
平面図・壁面図

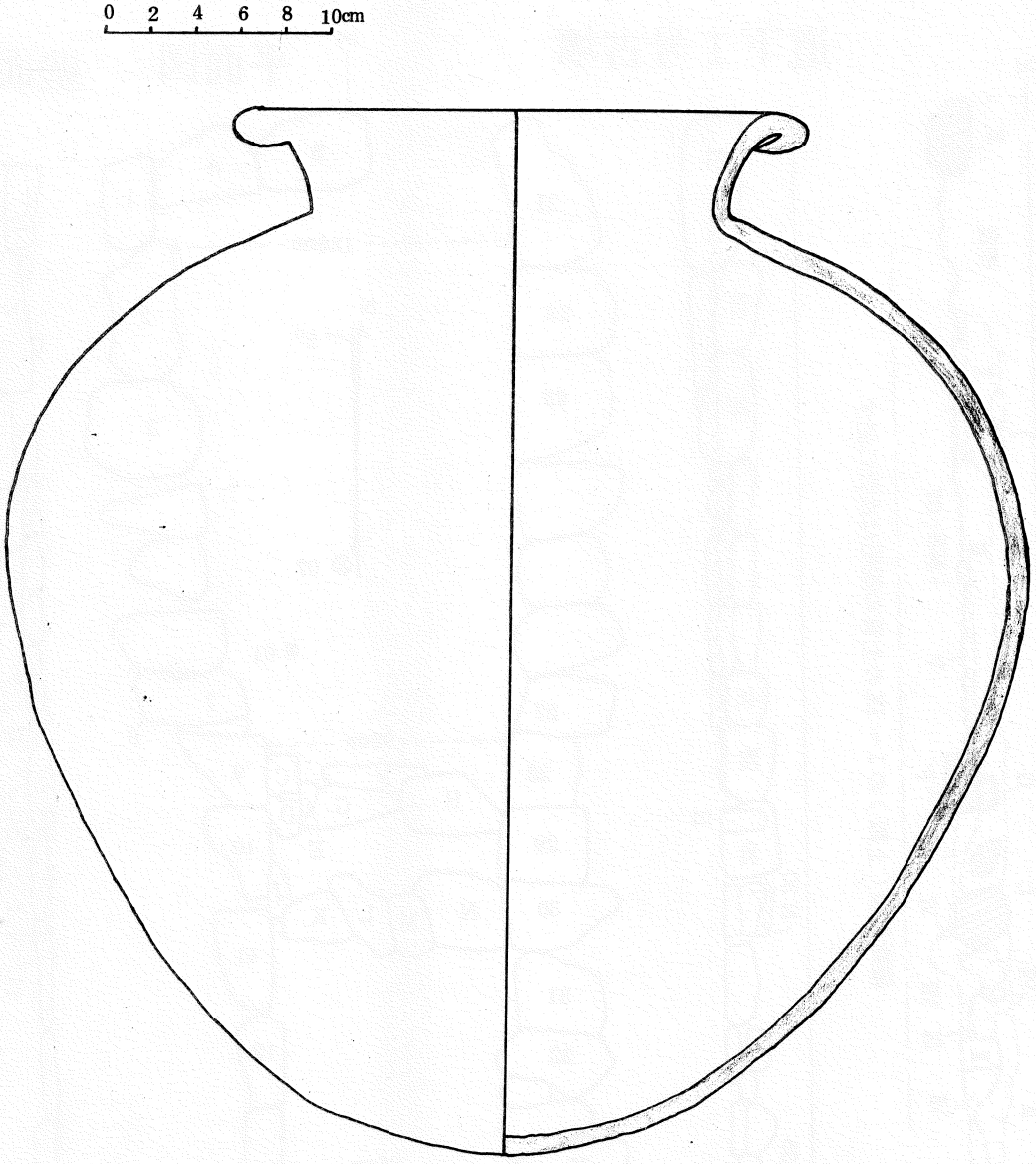



小森塚3号墳
平面図
ア—勾　玉
イ—鉄　刀
ウ—須恵器
A'
B
B'
C
D
E
F
K
21°
N
断面図
0 20 40 60 80 100cm

小森塚4号墳　平面図

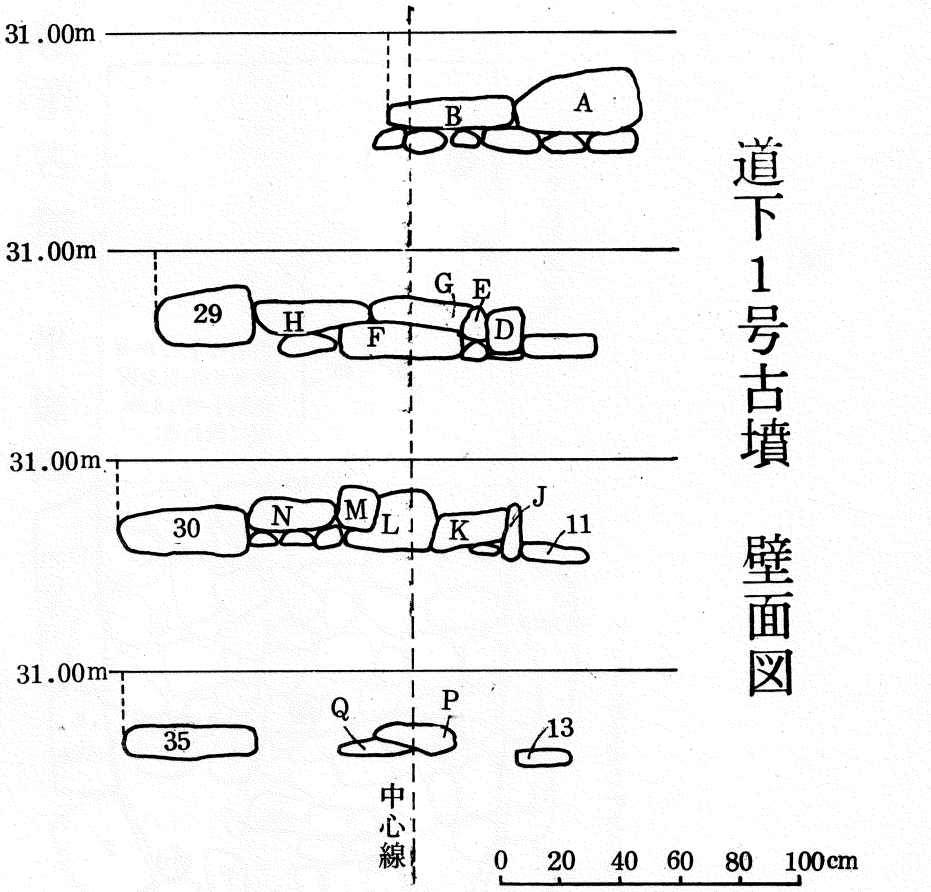


小森塚５号壺棺（須恵器）



道下１号古墳

平面図
壁面図
128cm
92cm
85cm
N
2°
07
01
31.00m
標高
右
壁
左
撹乱
杯S−07
縦断面図（上図）のⅠ～Ⅸの土質の説明は次頁に記す
0 20 40 60 80 100cm



≪道下１号墳土質の説明≫

Ⅰ　灰色粘土層

Ⅱ　白色粘土層（部分的には褐色を帯びる）

Ⅲ　白褐色粘土層（羨道部のより玄室部のほうが白色がかる）

Ⅳ　灰色の砂質粘土層

Ⅴ　褐色粘土層（最も硬い）

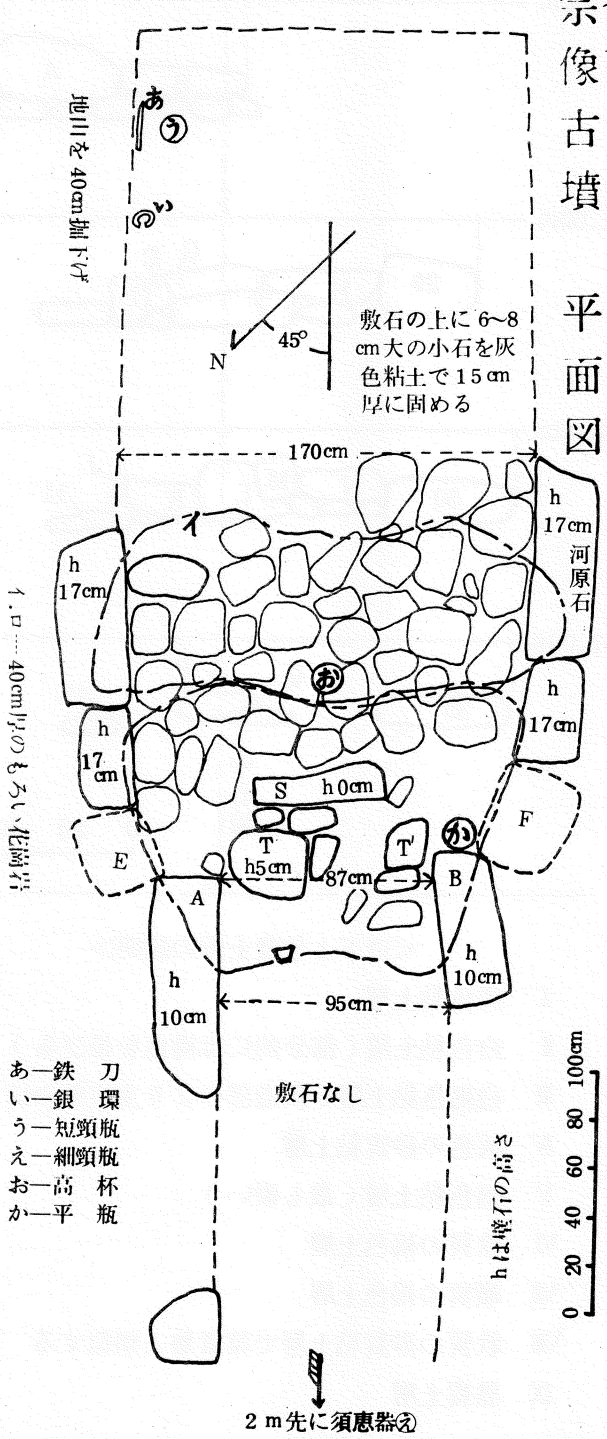
Ⅵ　軟質の褐色土層

Ⅶ　硬質の褐色土層

Ⅷ　軟質の砂質粘土層で第Ⅲ層と類似する

Ⅸ　黒質土層

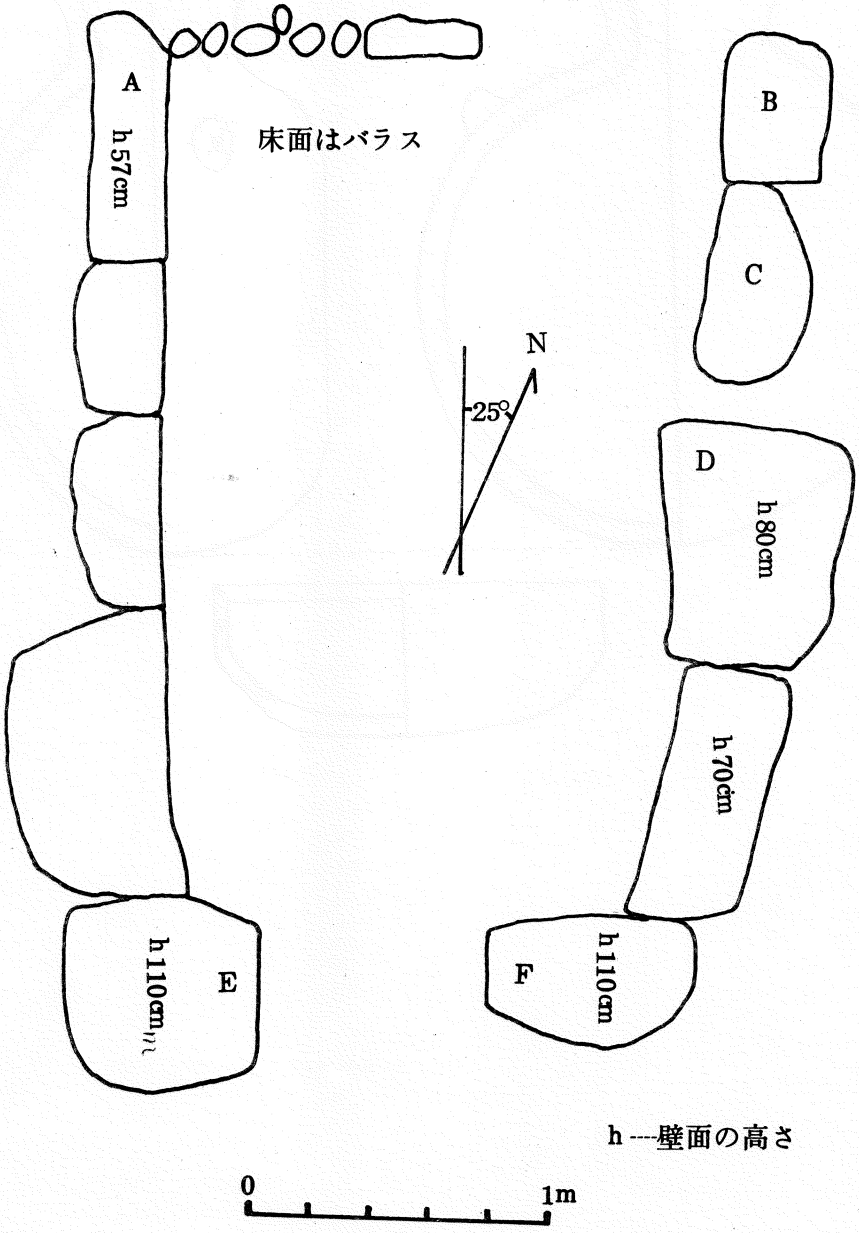
宗像古墳　平面図

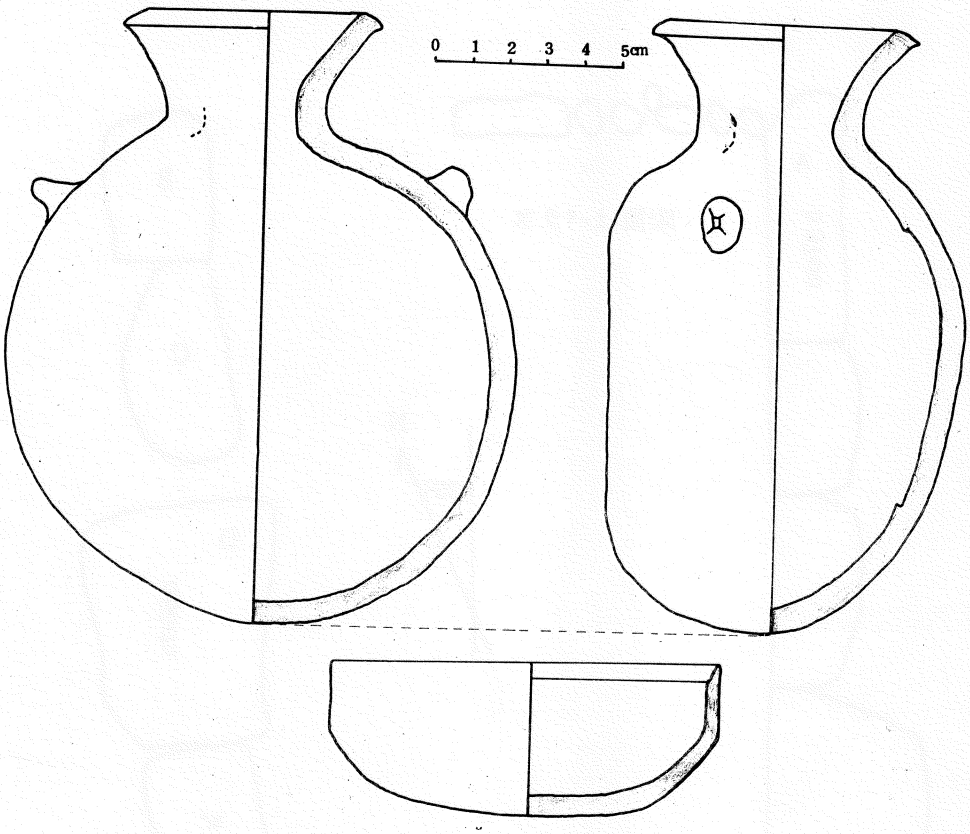


あ—鉄　刀
い—銀　環
う—短頸瓶
え—細頸瓶
お—高　杯
か—平　瓶

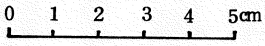
西の後１号古墳

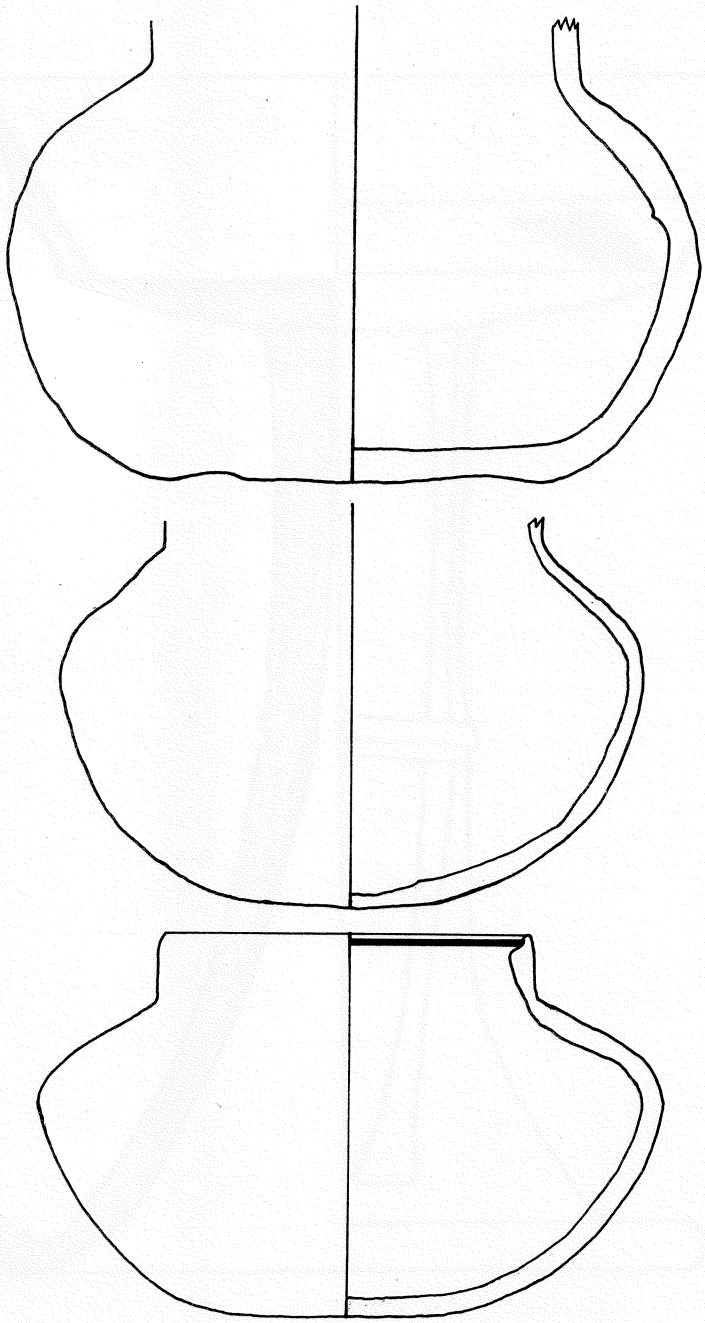
昭和34年11月11日




0 1 2 3 4 5cm

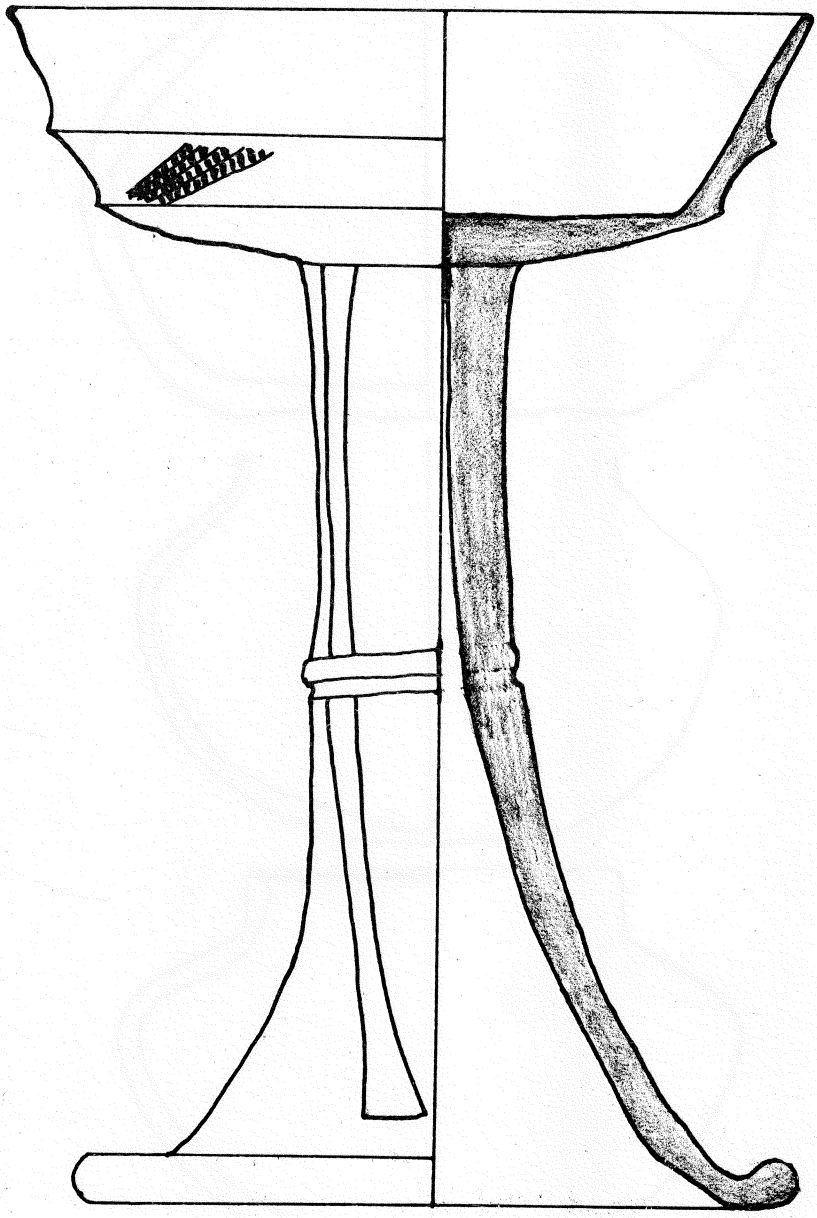
小森塚１号



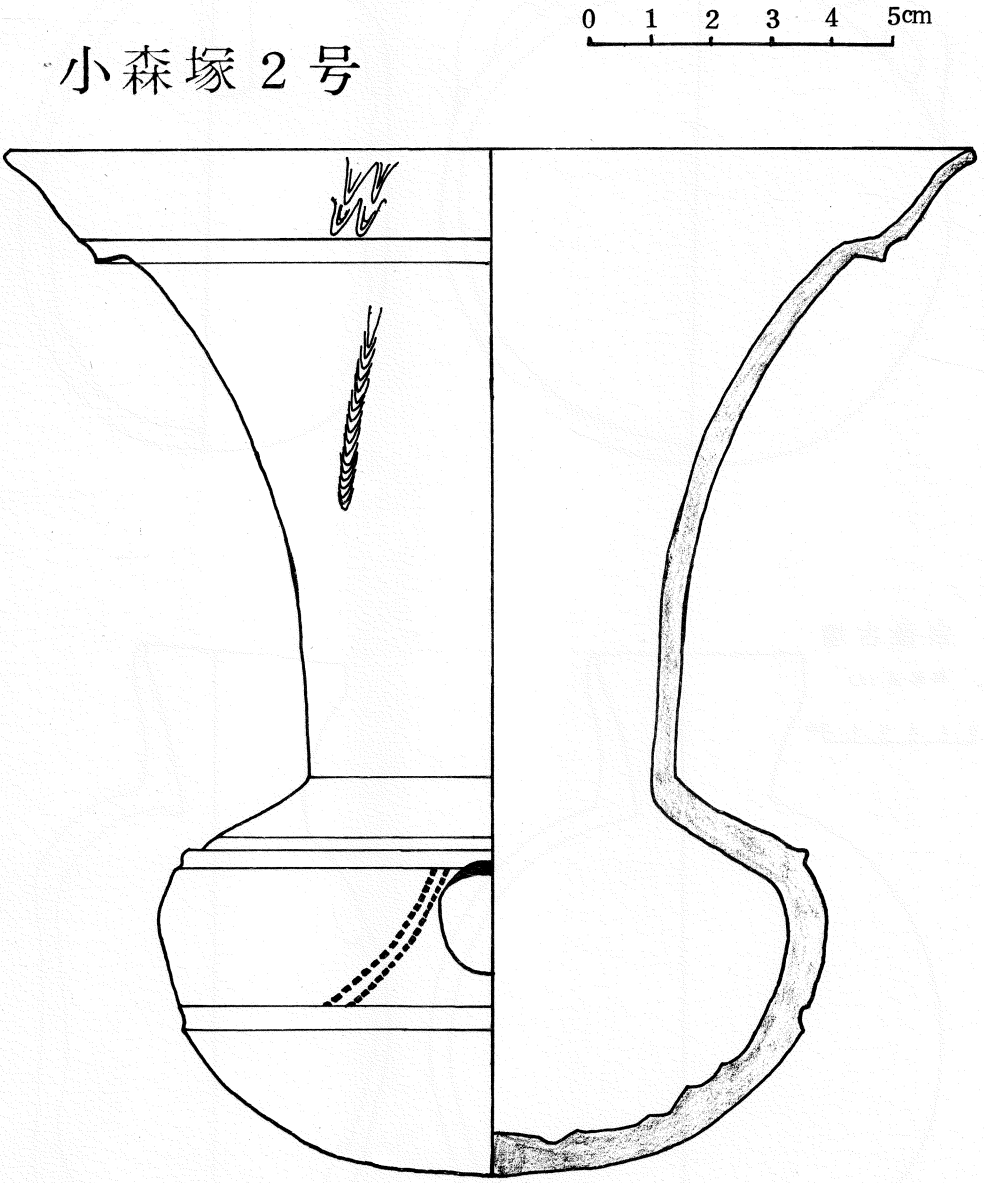


小森塚２号

0 1 2 3 4 5cm

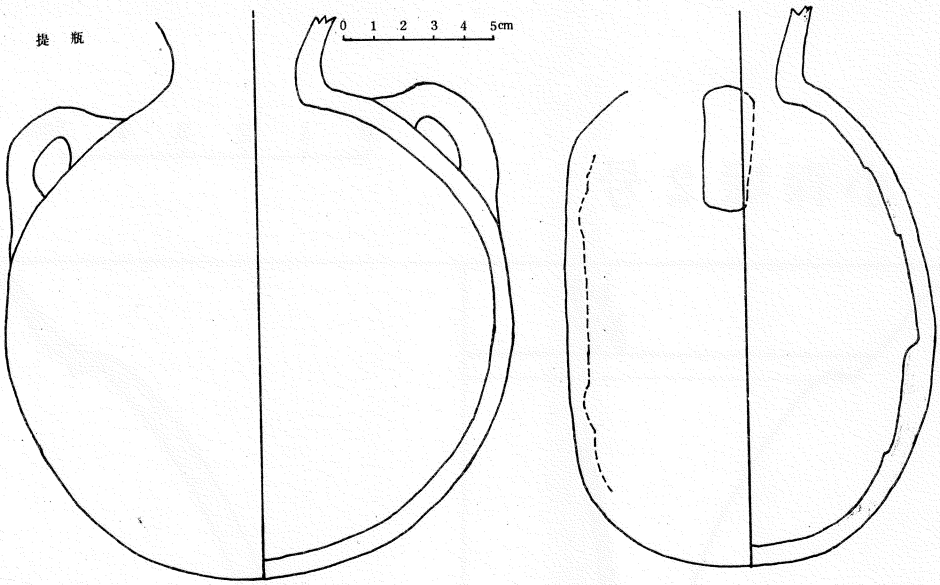


小森塚２号



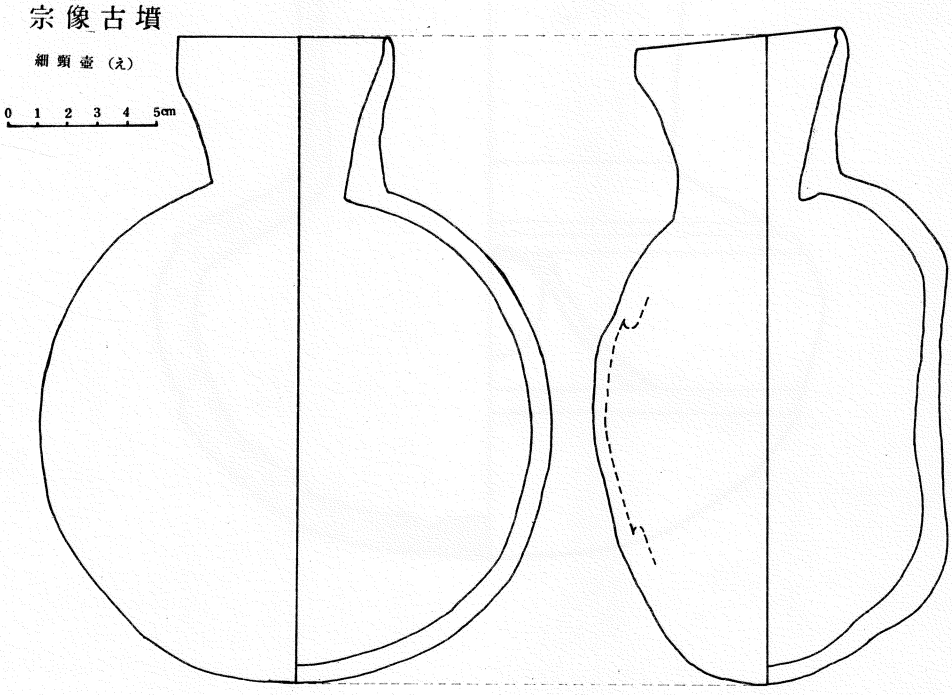
小森塚３号

提　瓶

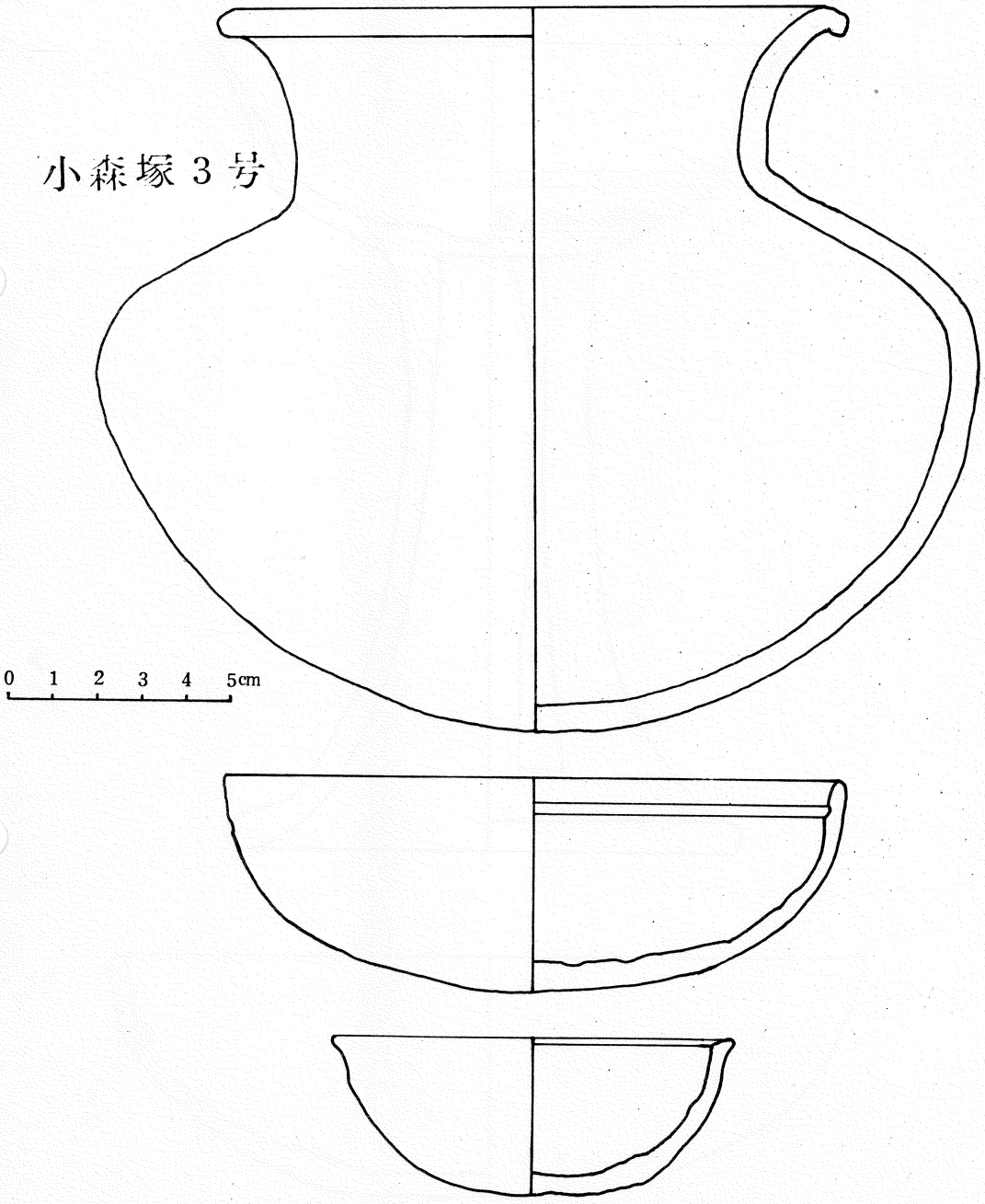


宗像古墳

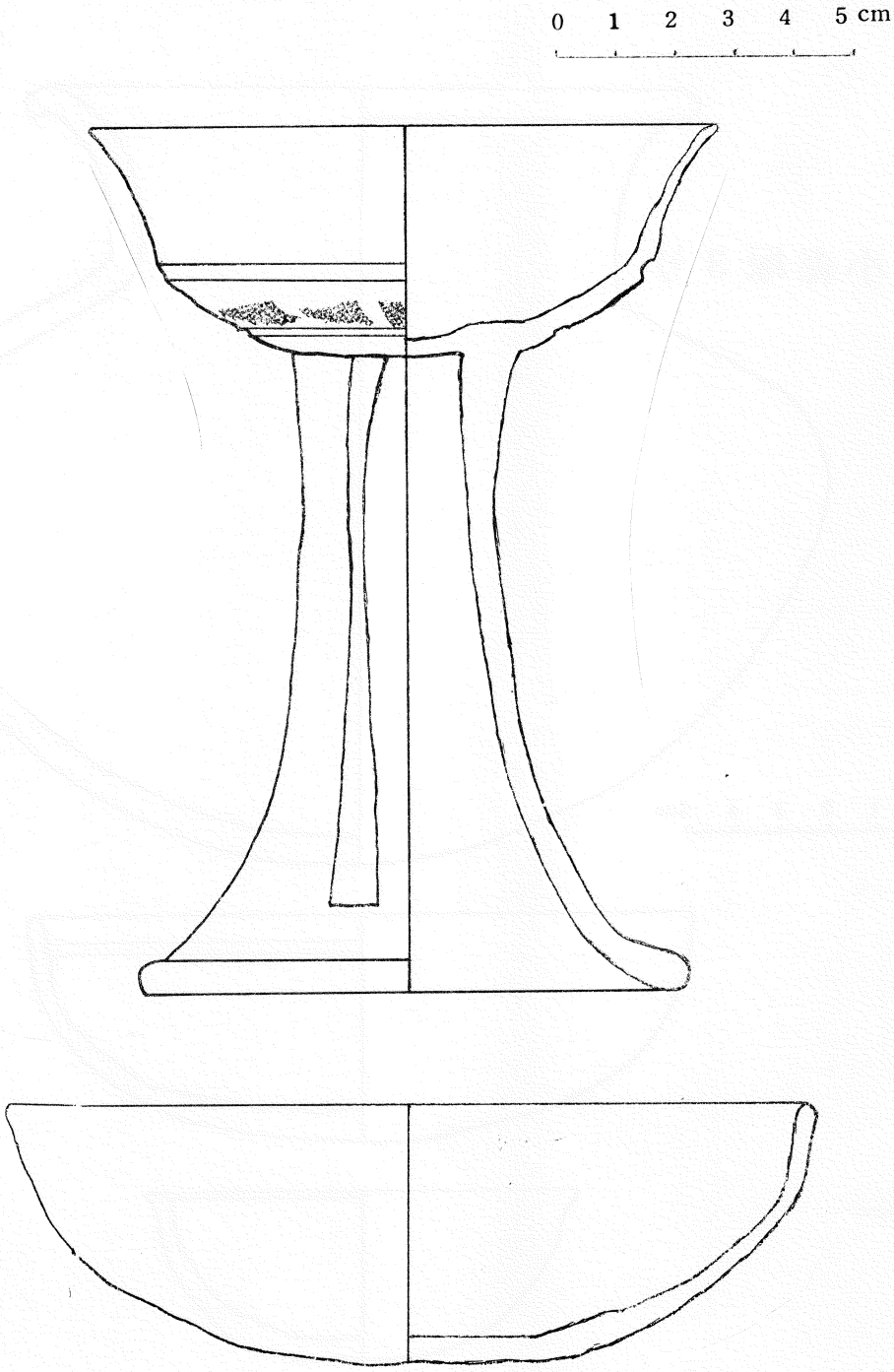
細頸壺（え）



小森塚３号

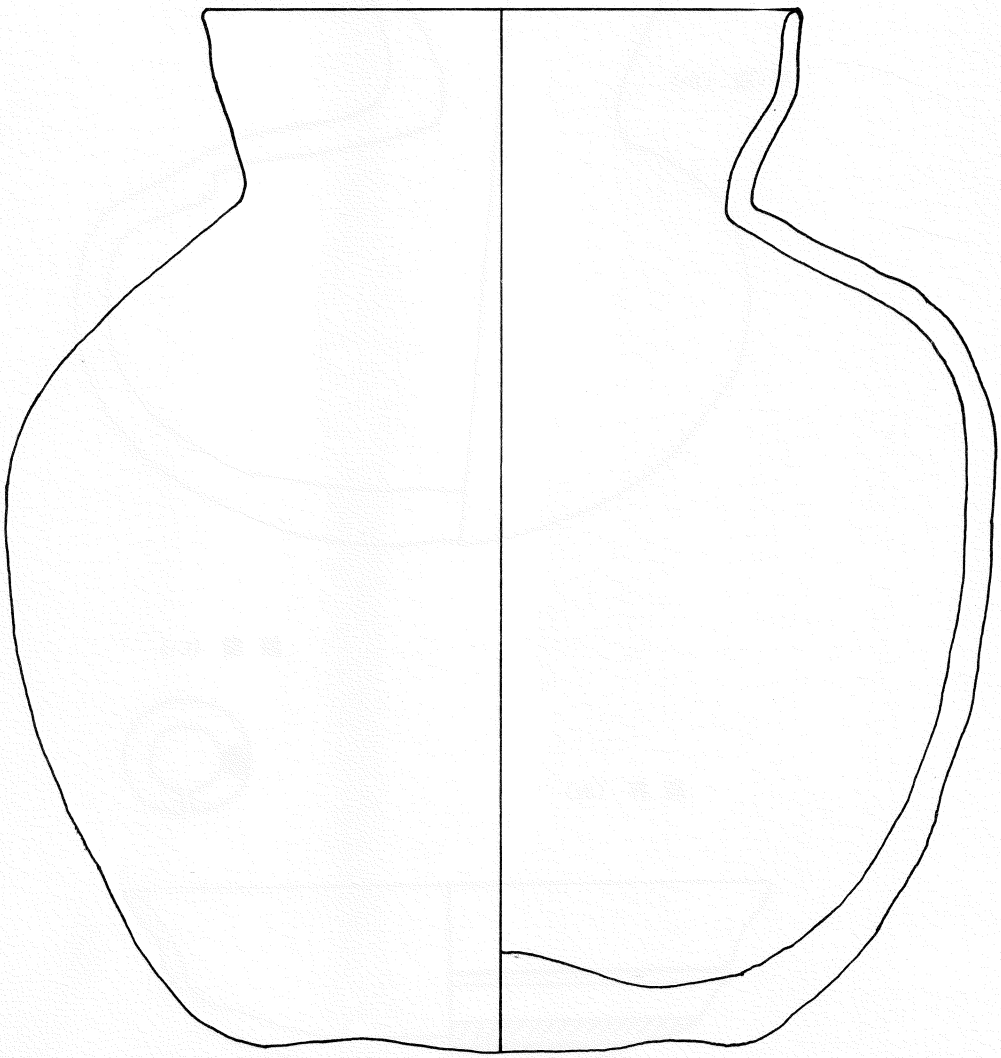


道 下 1 号



宗像古墳

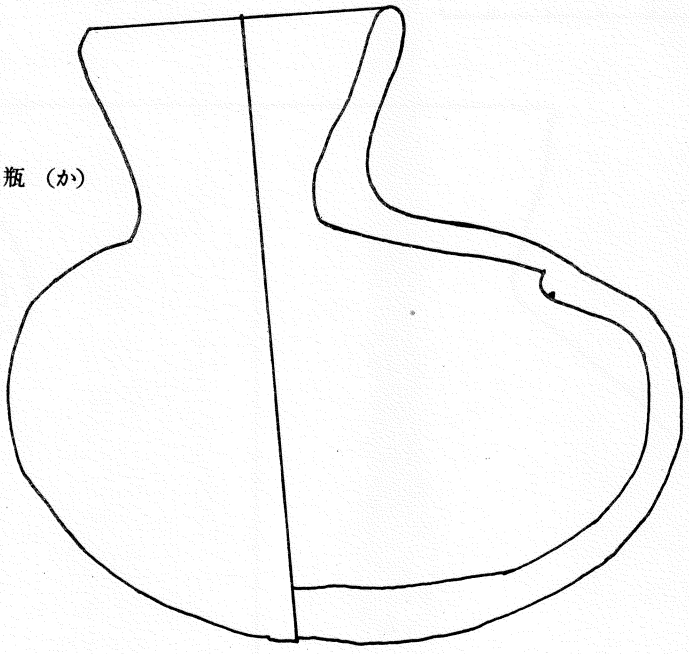
短頸壺（う）



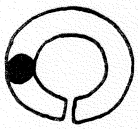
宗像古墳

0 1 2 3 4 5cm

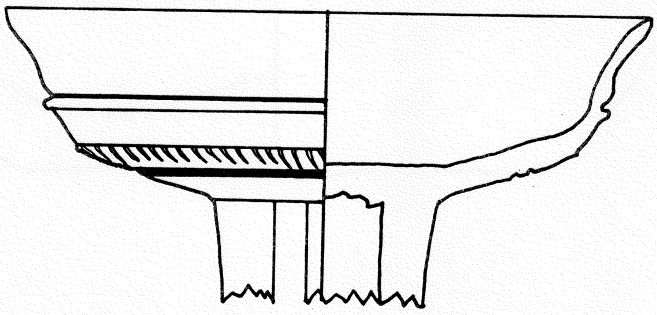
平瓶（か）



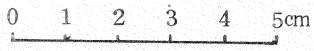
銀環（い）

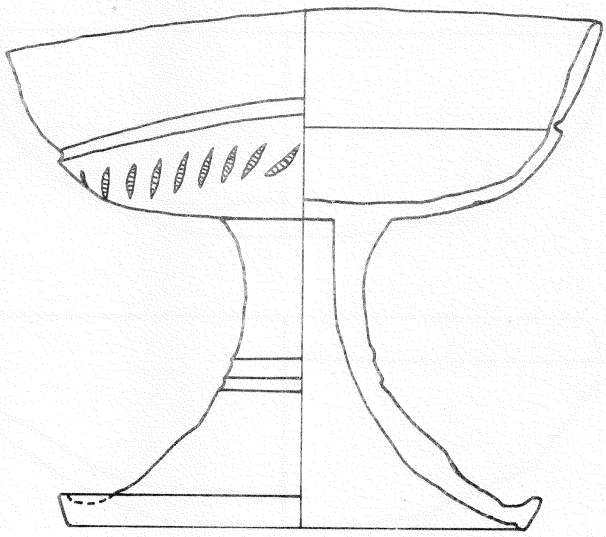


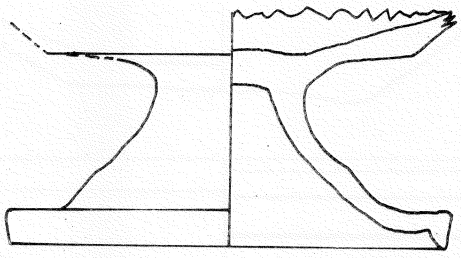
高杯（お）

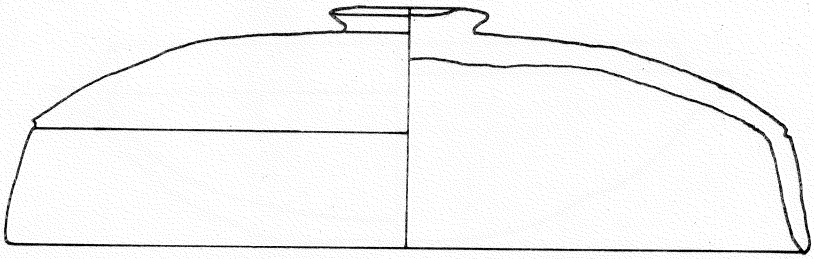


宗像古墳

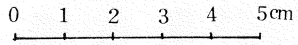


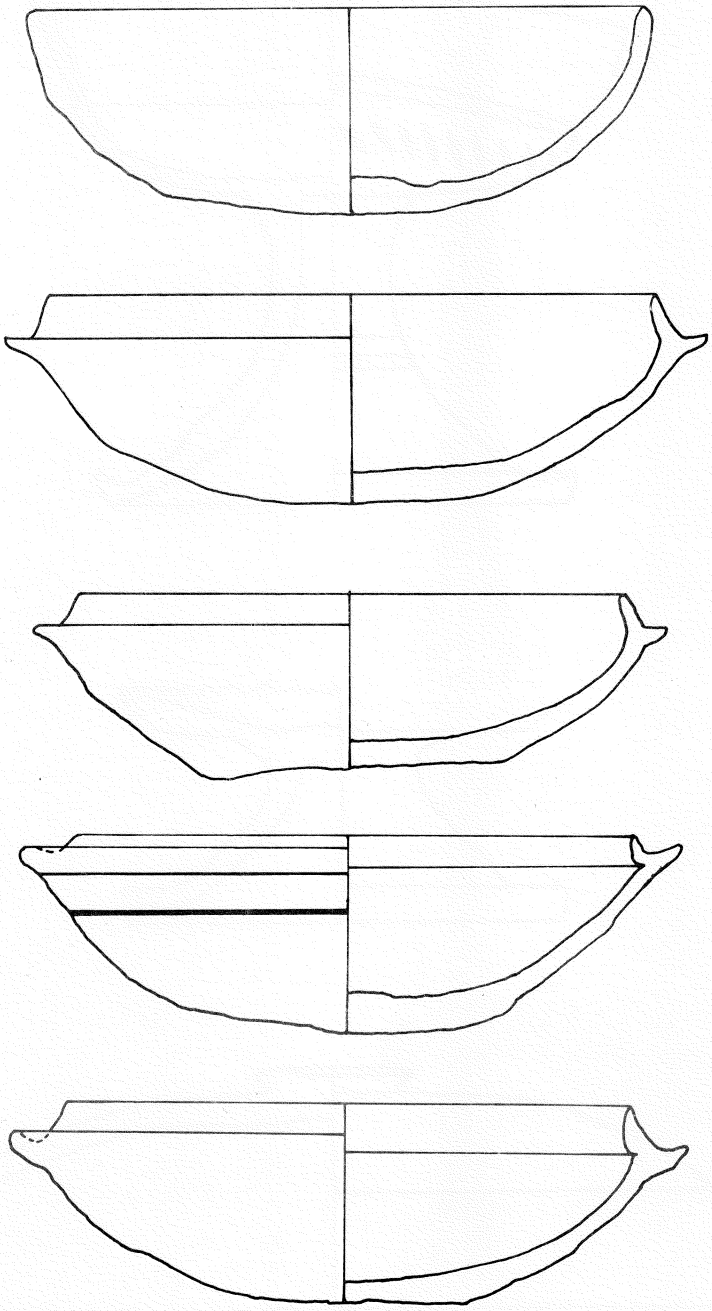






宗像古墳





小 森 塚 1 号

小 森 塚 2 号

小 森 塚 3 号

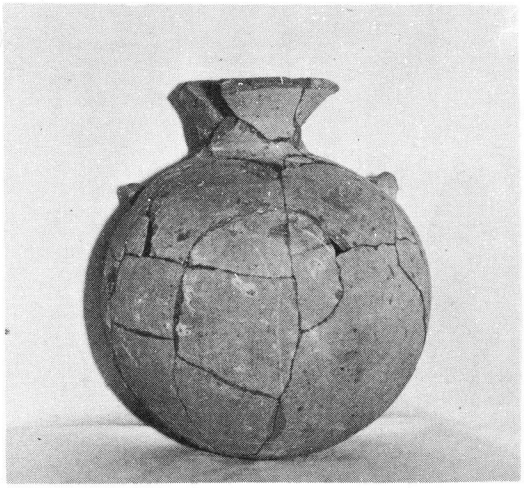
小森塚5号（須恵器）

小森塚4号

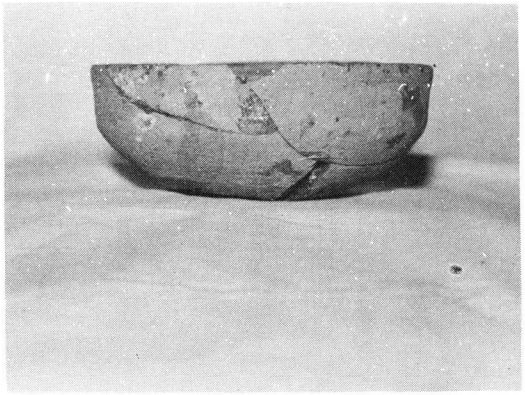
道下一号

宗像古墳

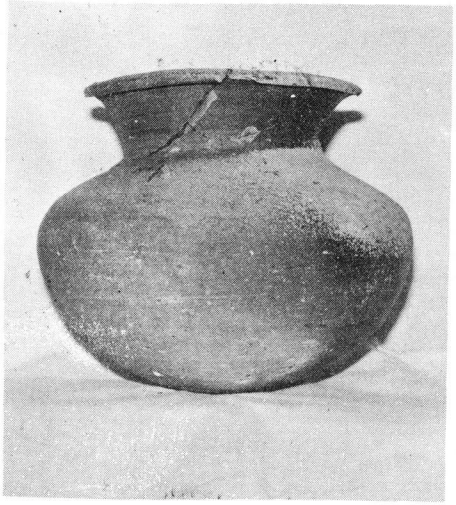
豆塚2号古墳



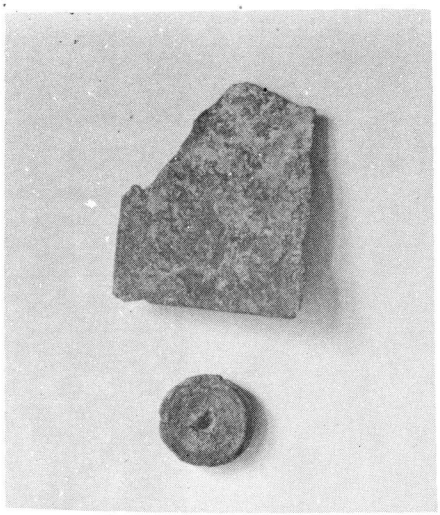
小森塚1号（須恵器）



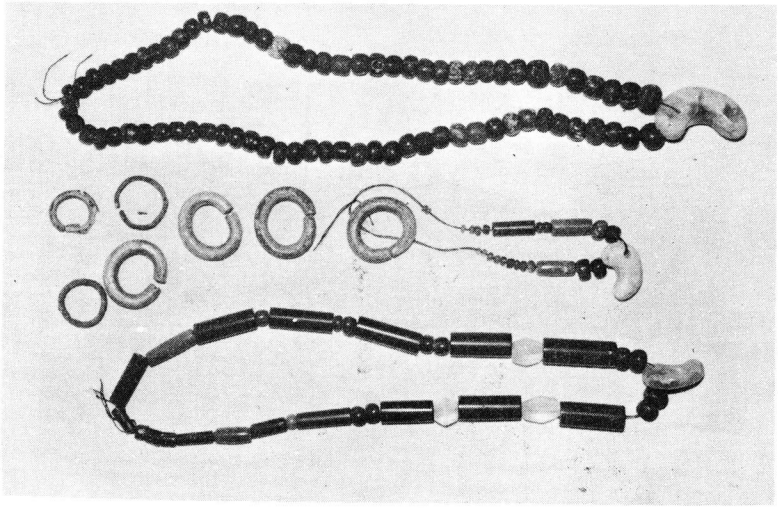
小森塚1号（須恵器）



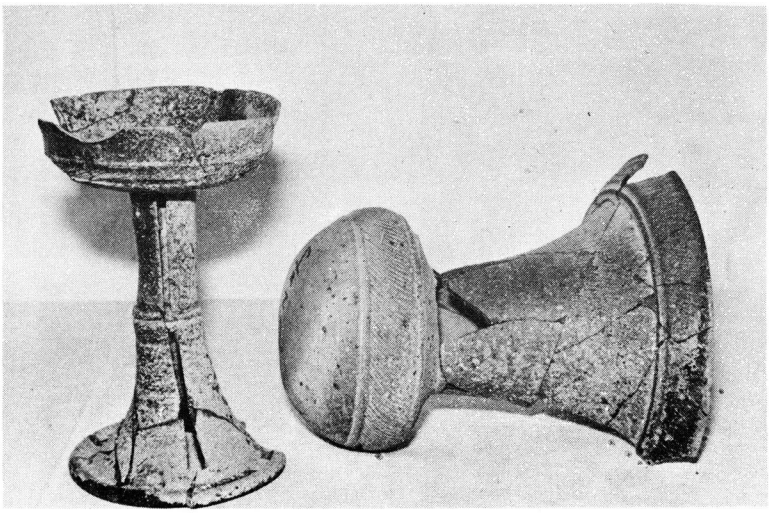
小森塚3号（須恵器）



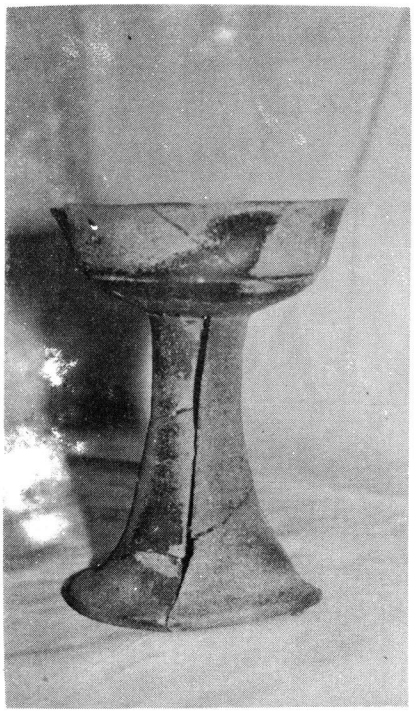
小森塚1号の貨幣
2号の金属板



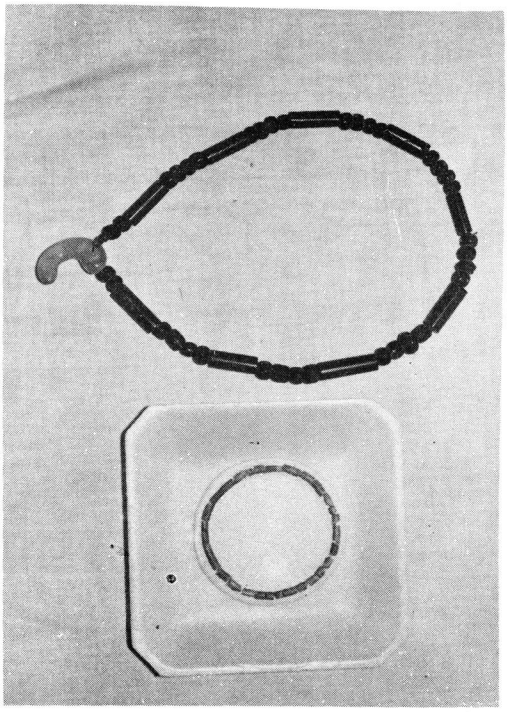
小森塚3号



小森塚2号（須恵器）

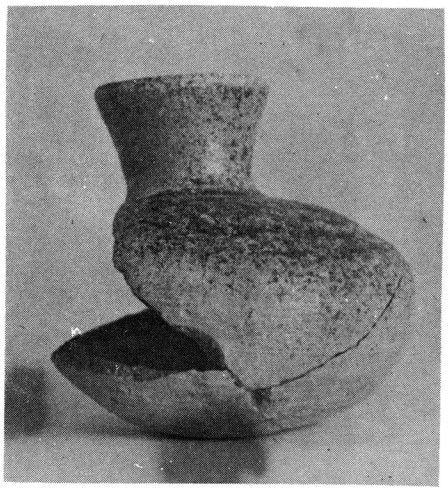


道下1号（須恵器）

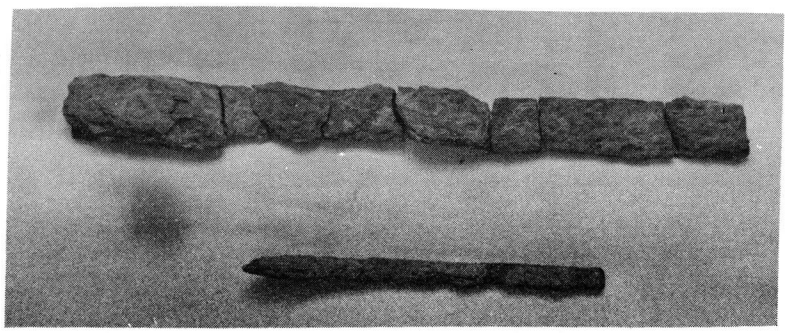


小森塚2号

宗像古墳（須恵器）



宗像古墳（須恵器）



宗像古墳
太刀とヤリガンナ

報告書第1号

<非売品>

発行日　昭和49年3月31日

発行所　三豊郡大野原町教育委員会

編　集　同　上

印　刷　有明高速印刷